

特40

38

明清  
汪廷錫  
先生  
年譜  
卷之二

上卷

東 京 圖 書 館

一 冊	一 號	三 三 架	八 九 函	傳 記 類	和 書 門
--------	--------	-------------	-------------	-------------	-------------

延平國王姓龔像



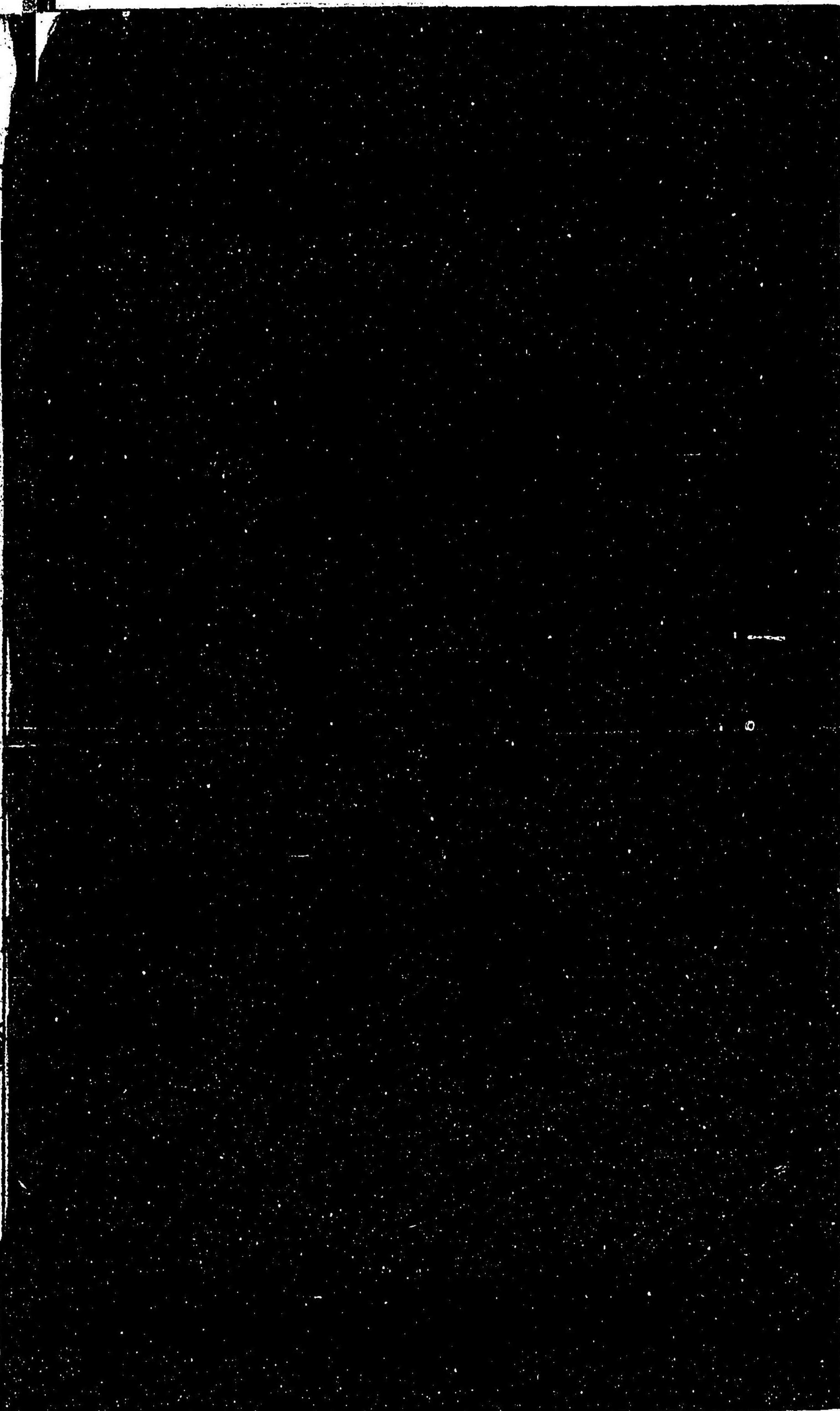
明法軍法

忠國姓龔  
義節

東京閩生舍發兌

卷40  
38

延平王國姓翁像



李漢章

不食清粟以死  
曆年一甲入海  
忠孝古今

松溪李漢章



題飛虹傳

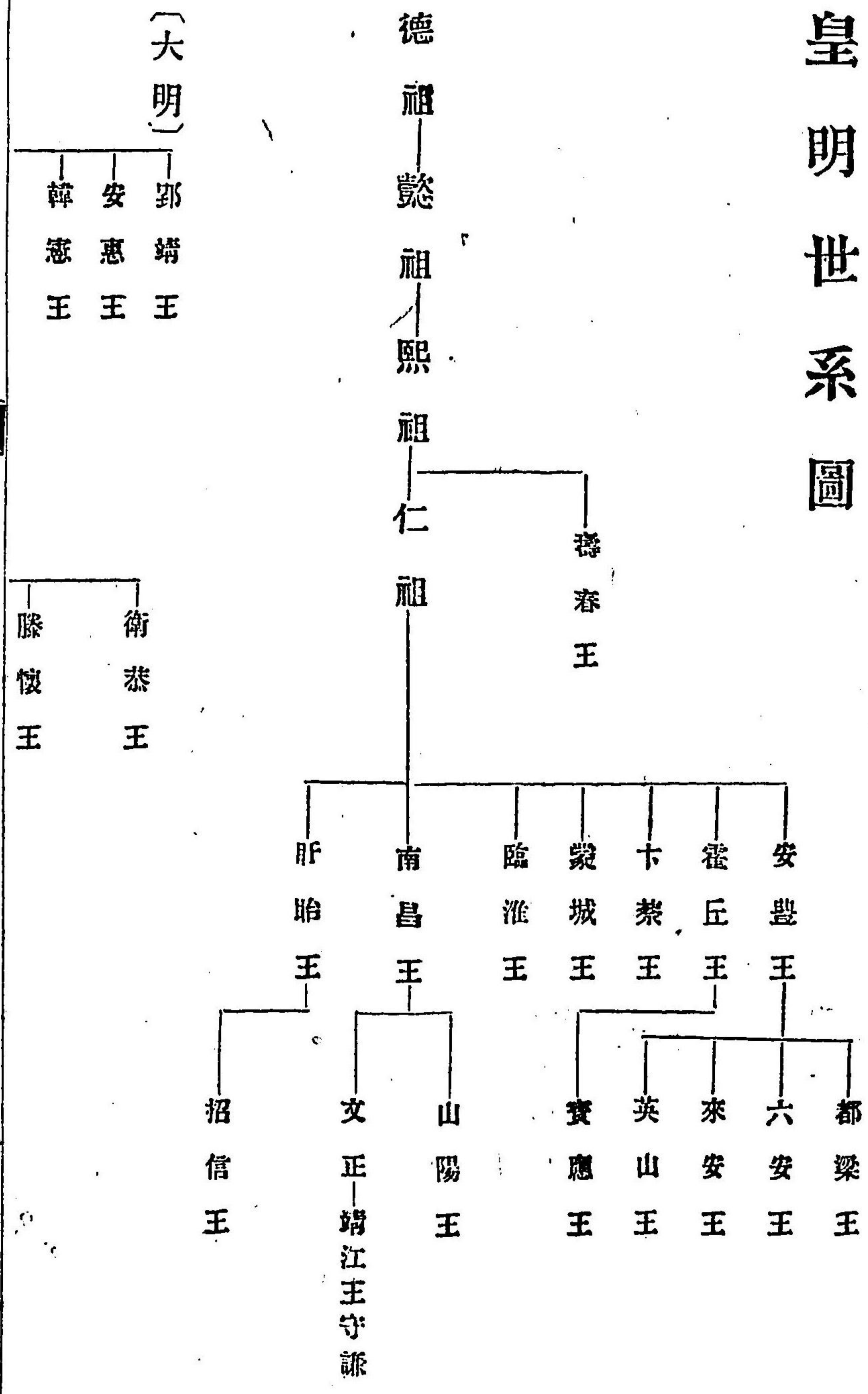
以王道興。以霸道亡。是正坐的好議  
論。以霸而興。以王而亡。是倒行的新  
摸樣。車輪眼者。廓然觀之。古今世界。  
絕似一副大棋局。多少英雄豪傑。止  
向全局中。爭一個劫耳。康熙爺有言。  
日月燈。江海油。風雷鼓。版天地間。一  
大戲場。堯舜旦。湯武末。操莽丑。淨古

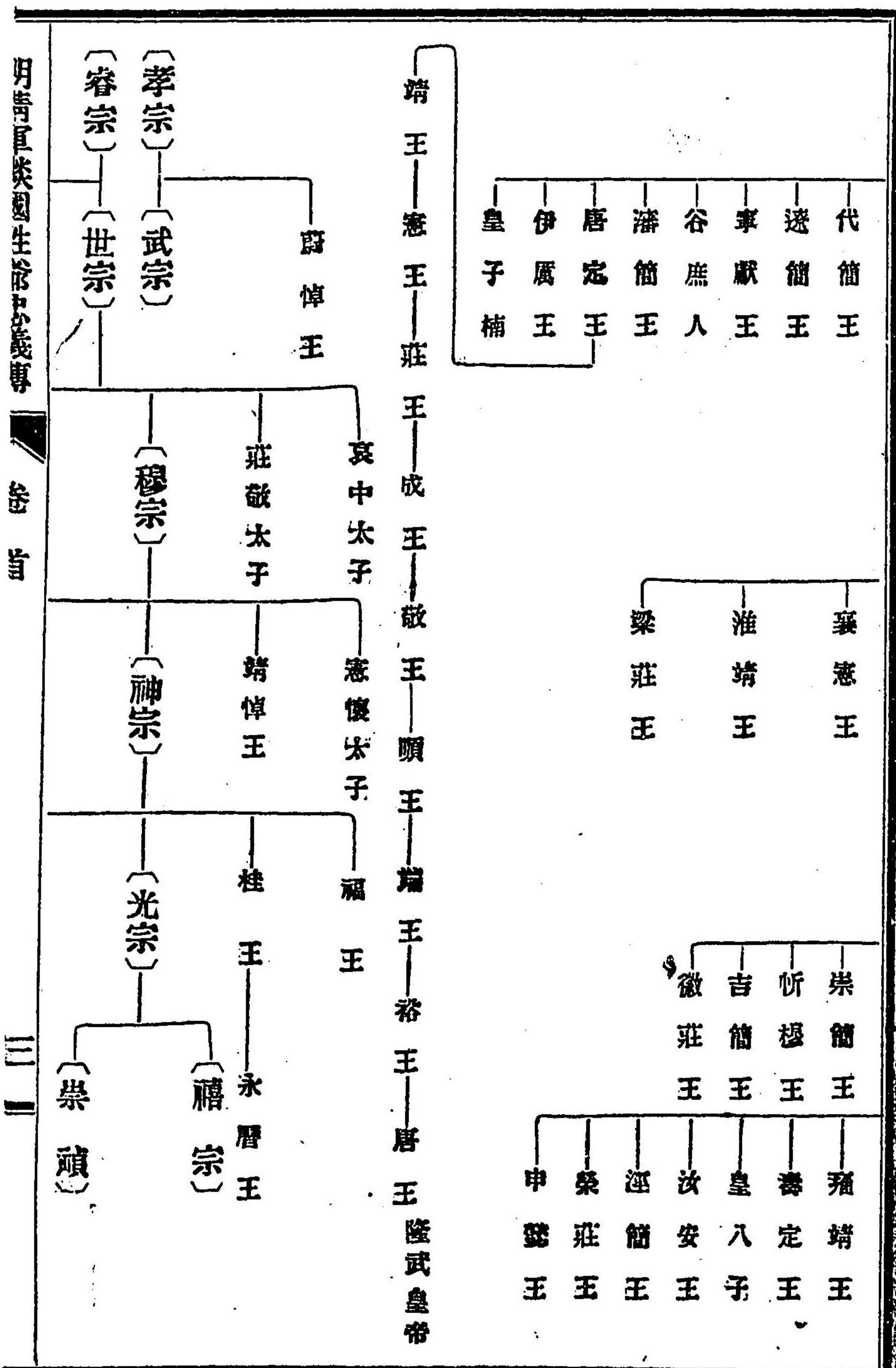
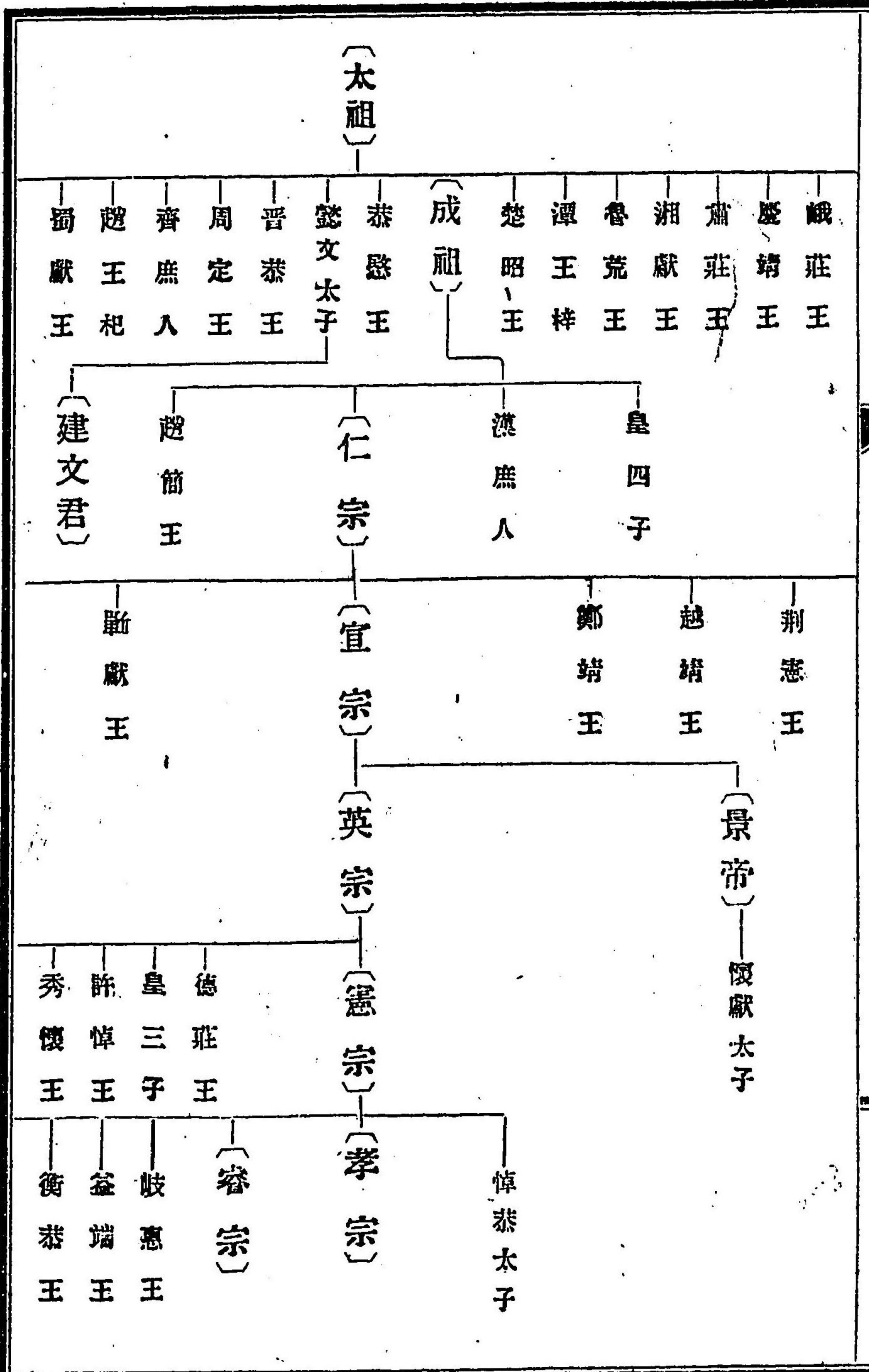
今來許多脚色。真有大志的膽肚。便  
上出世的筋骨也。今後儒士區區者。  
且莫看經。請看飛虹傳。

楮州張公子

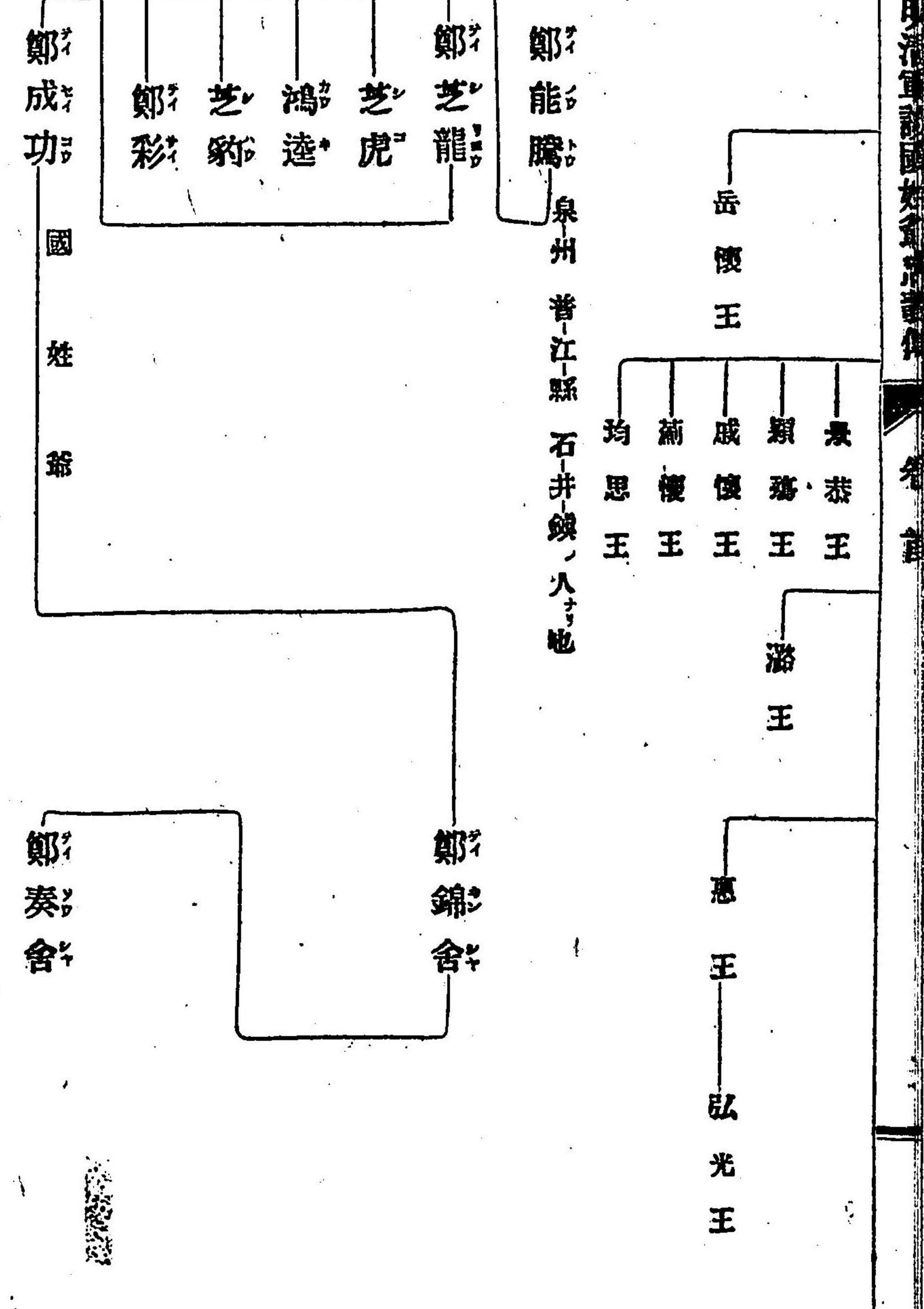
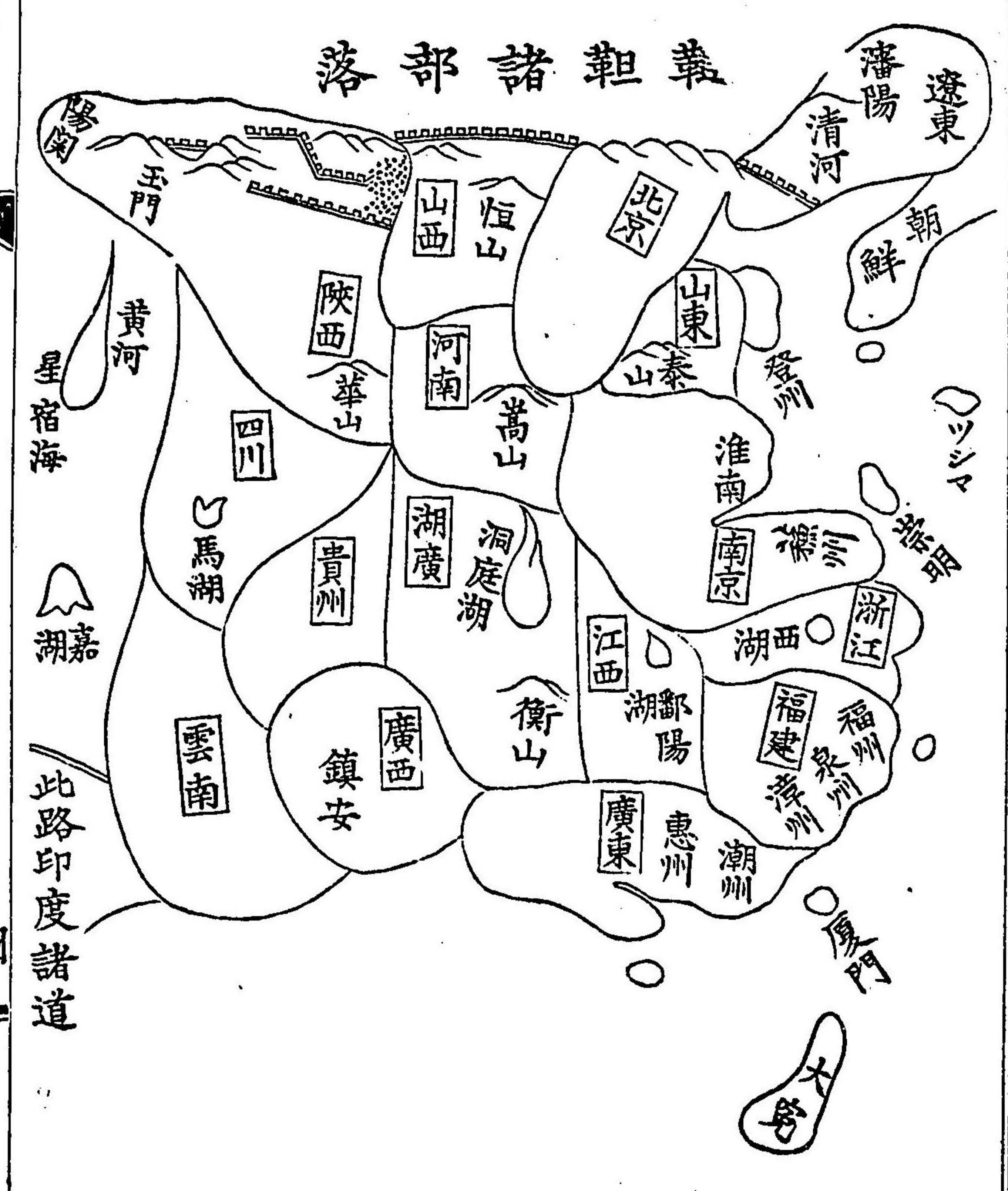


### 皇明世系圖





# 大明三十省圖



此路印度諸道

明倫彙編 家範典 卷一百一十五

中華十五省

(二) 京 南京

至北京三千四百四十五里

北京

(十三) 道

十三道、皆布政司を置て、一道を統ぶ、道規其所に依る、中華に一里ハ、日本の六町をまりに當ると知るべし

山東 濟南府

北京九百里

山西 太原府

北京千八百五十里

河南 開封府

北京千七百七十五里

陝西 西安府

北京二千六百五十里

湖廣 武昌府

北京五千七百七十五里

江西 南昌府

北京四千七百七十五里

浙江 杭州府

北京六千三百三十三里

福建 福州府

北京二千八百七十三里

廣東 廣州府  
廣西 桂林府  
貴州 貴陽府  
四川 成都府  
雲南

北京七千八百三十五里  
北京四千三百九十里  
北京七千四百六十二里  
北京四千二百九十五里  
北京七千七百三十三里  
北京四千三百九十里  
北京一万七百里  
北京七千三百六十里  
里數不知

遼東

朝鮮鴨綠江五百六十里 北京千七百三十里  
同國長白山一千三百里餘 南京三千四百里

廈門

又の名ハ思明州泉州の南海中の島なり北京に至る七千四百里餘、南京に至る三千四百里

大宛

又ハ臺灣、俗には多可佐古と呼ぶ泉州ハ南海中の島なり、泉州より澎湖島に至る、舟行二日なり澎湖島より大宛に至る、半日にして行へし

舟山

南海中の島なり、普陀落山に近し



通俗國姓爺忠義傳總目錄

卷之一目錄

萬曆帝御世

朝鮮乞兵防倭

僧達觀坐化獄中

宮裏四時嬉樂

楊應龍劫西蜀

卷之二目錄

鞞鞞建國號太清

劉綎決策進兵

鄭芝龍為遼經略

清兵擊撫順城

貝勒王救附馬鐵

兩皇隔月即位

卷之三目錄

鄭芝龍上疏求勘

貝勒王奪瀋陽

客魏行茲亂政

魏闖線索亂國

卷之四目錄

婉童爭奇會

王順撫敗績廣寧

鄭芝龍再守遼

芝龍坐事下獄

卷之五目錄

鄭芝龍求藥渡日本

吳縣民夫死義

楊左坐事斃獄

天啓帝詔信王

卷之六目錄

崇禎帝滅客魏

李自成為闖王

宋孩兒獻策

李自成落艸河東

李巖開倉賑飢

卷之七目錄

湯同昌赴湖廣

左良玉破賊營

兩賊大戰河南

李明睿勸南遷

周遇吉死節

卷之八目錄

崇禎帝封臣擊賊

宣府兩將降賊

闖賊陷北京城

諸臣殉死報國

帝之九目錄

列女各自死節

李自成登極

吳三桂請兵雪憤

吳襄遞簡招三桂

吳將軍長驅南下

卷之十目錄

吳將軍破賊京城

牛金星計殺李巖

吳將軍開扒山陣

闖王李自成死羅公山

卷之十一目錄

張獻忠死漢中城

太清定鼎燕京

福王即位南京

太清遣書南京

卷之十二目錄

弘光帝徵鄭芝龍

鄭鴻達鑿北兵

左龍玉戰白鷺灘

卷之十三目錄

鄭芝龍招撫左良玉

清豫王破鎮口城

清豫王奪南京

卷之十四目錄

唐王即位福州

隆武賜國姓鄭森

隆武帝出御軍

卷之十五目錄

鄭芝龍還安平

隆武帝崩汀州

卷之十六目錄

國姓爺立永曆帝

國姓爺奪南洋島

卷之十七目錄

國姓爺奪安海

國姓爺破福建兵

卷之十八目錄

永曆帝奔南寧

函輝使大宛島

清兵破紹興城

貝勒定計捕鄭芝龍

國姓爺破廣東

瓊燕姿色傾城

固山中計戰死思明

國姓爺請兵日本

函輝定計殺阿克商

國姓爺定大宛

卷之十九目錄

國姓爺計破崇明

國姓爺敗走鎮江

國姓爺橫槩賦詩

康熙帝平定天下

通俗國姓爺忠義傳總目錄 終

通俗國姓爺忠義傳卷一目錄

卷之一目錄

萬曆帝御世

朝鮮乞兵防倭

僧達觀坐化獄中

卷之二目錄

鞏鞏建國號太清

劉綎決策進兵

鄭芝龍為遼經略

卷之三目錄

鄭芝龍上疏求勤

貝勒王奪瀋陽

宮裏四時嬉樂

楊應龍劫西蜀

清兵擊撫順城

貝勒王救附馬鐵

兩皇隔月即位

客魏行姦亂政

魏闖線索亂國

卷之四目錄

婉童爭奇會

王順撫敗績廣寧

卷之五目錄

鄭芝龍求藥渡日本

吳縣民夫死義

鄭芝龍再守遼

芝龍坐事下獄

楊左坐事斃獄

天啓帝詔信王

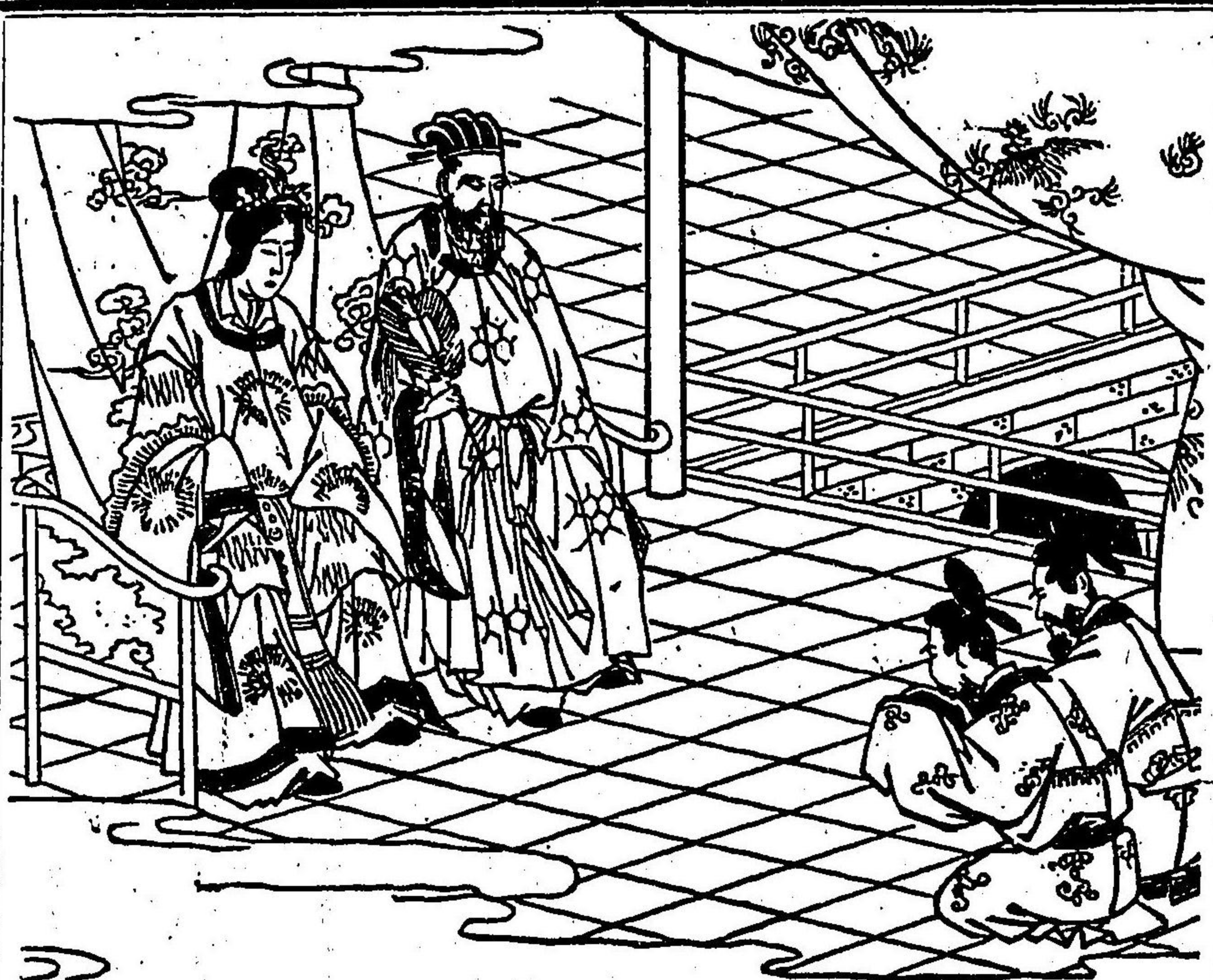
明清軍談國姓爺忠義傳卷之一

萬曆帝御世

昔中華洪水天に滔り。萬民其苦に堪ざりしに神禹よくこれを治て。四海の憂を救ひ玉ひ。内を九州と名けて貢せしめ。外を九夷と呼で庭せせ。華夷内外の別有て國人其居を安んぜり。されば東夷西戎南蠻北狄として。四方のえびそめる中に。只北狄の一種のみ。心剛より力強くして生なむのち馬を善と。所謂る夏の獯鬻。殷の嚴狁。秦漢の匈奴。唐の突厥。宋の契丹。明の韃靼。これ皆北狄の異名にして。古今史冊の記す所。唯今の時世の稱呼に從ふのみ。然るに中華歴代の帝の中に。若逸遊を事として。政に怠り。國衰る時。必らずしも北狄より。攻來ること度々なり。さるに依て秦の始皇帝。華夷の界に一萬里の石垣を築かせ。萬里の長城と名て。彼を防ぐの要害とと。其後漢唐の際にも。尙この患防ぎ難く。或は公主を嫁せて。好みを結び中華の爲に兵を借し。寇亂を防ぐ。宋の帝道衰ふる。間に乘じて契丹の別部蒙古の軍勢犯し來遂に中華を奪取り。宋に代て天下を有ち。國號を大元とぞ申しける。實に代々の古より。華夷の戰爭やまざりしに。蒙古實詐より登り文物の國。忽ち胡土と成ぬされ其元の代を有てる。世祖より順宗帝に至るまで。代々十四主を重ねれども。僅八十餘年にて。程なく亡び失にけり。夫元の衰ふるに及て張士誠陳友諒明玉

珍等蜂起すと雖も。應れたるを興して。帝業の基を開らざるは。漢の朱元璋字の國瑞と云し人にして。元の至正十五年乙未。兵を起し。十一年の戦に。元を亡し四海盡く大明に統一統し。洪武元年戊申。金陵の南京にして即位す。太祖高皇帝これあり。第二主建文帝。靖難の亂に出奔し玉ひ。燕王位に即玉ふ。第三主を成祖と申し奉る。斯御宇に當て。北狄復蜂起して。虜勢進み來れる由。永樂帝之を聞召。六軍を引率し。自征伐したまふ。虜の大將韃靼の三主討負て。やがて降を請にける。皇帝彼等が罪を免しうのうへ古よりの例に準じ本雅失理を賢義王。馬哈木を順寧王。阿魯台を和寧王とし。各封號賜りて。朝貢を受玉ひけり。されども胡の性悪くして。物に反りて寇盜の業とし自ら愧されば。大明代々の間にも。叛逆すること度々なり。成祖先に宮殿を燕都に構へ。萬國の朝貢を受させ玉ふ今の順天府北京これなり。まことに明の盛事を考るに。永樂の朝は過たることなしと云り爾しより後。仁宗。宣宗。英宗。景帝。憲宗。孝宗。武宗。世宗。穆宗皇帝に至るまで。皆北京に登極せし。太子を南京にぞ置り。此時兩都の繁華のさま。譬て言んうたもなし。こゝに第十三主萬曆皇帝の十年より。國運漸く澆季にあり。連年旱魃うちつき。五穀もとのらざりければ。百姓の死亡多かりき。帝深くこれを憂へ玉ひ。自災熱の庭に出で。悉も龍顏の焦るゝまで。日中に立ち天を呼で祈り玉ひしかば。まことに至誠は神明を感動し玉ひぬると覺しくて。さしも久しく晴たり。一點曇りなき大空に油然として雲興りて。甘雨忽降下り。おまねく千里を澤せり。民庶旬野に手を拍て

喜ぶことは限なし然れ共地震風なきは。惟を爲す處に。同十二年魏祖の阿魯台叛逆し。遼加奴仰加奴を兩大將とし。都合其勢三十萬。海西にころ押寄たれ。朝廷に百官を召集り。評定已に一決し。李成梁を遊擊將軍とし。李松を總兵とし。五十萬の兵を相添て。これを防がせらる。もとより成梁は魏祖第一の名將なりしかば。どぞと軍兵を引分て。四門の關河に伏置し。自要害を守り。敵を怯るゝ如くして。敢て師を出させ。しづまりかへつて防ぎまもる。かゝるどころに北胡の勢。敵の小勢をなごつて。寒威を更に事ともせず。江西の堅冰河を。やすくと打たり。鼓を鳴り我先にと。おめき叫で寄來る。官軍の兩將は。思のまゝに敵を引入れ。相圍れ砲石放ちければ。伏置たりし。魏祖兵の軍勢數十萬。一度にせつと突て出で。前後左右へ殺倒す。虜の勢三十萬。大に驚き途にまよひ。山林深く引けて。あとも見せして引退く。伏兵これを待たりとし。戈を揮てまつしぐらに。跡をたあて逐かくる。成梁の機に乗じ。青馳を馳らして。偃月刀をさしかざし。逃る虜を趕て行く。虜の大將仰加奴の。官軍に圍まれ。還るまじとや思ひけん。丈八の蛇矛をさしへの。紫羅を駑迴して。成梁を睨み飛かゝる。官軍は魏祖徐陸。間をかけへだて。桿子鎗を合せて。十合までぞ戦ひける。勝負いまだ分たざるも。虜軍より毒箭を放つこと。西風の世花を散すに異ならせ。あやまたせ徐陸が馬に下腹に。中ると見ろしが其まゝに。一聲急に嘶て。一丈ばかり飛騰る。徐陸のこれを事ともせず。猶々進み近づきけり。仰加奴の破綻を見。蛇矛を以て衝かけ。馬より落るを虜の勢。聚まり首を挿て



總兵の李松はるかたこれを見るよりも。成梁討せ  
 てうなり。白馬を縦横に驅らせ。士卒を無算たらし  
 め。黒煙をたて。馳來る。仰加奴きつと之を見て。鐵甲  
 の胸板打鳴し。やめ。表明の弱將はら。空鎗の。そるく  
 て。文字の白戰書すとも。白刃の勝負の。よも知じ。さ  
 や。冥途黄泉の。敵せんぞ。あま。に。あな。に。染たる。蛇矛  
 を。ま。つ。こ。か。に。指かざし。進むと見えしが。謎人の。馬  
 上の。速者なり。けれど。忽ち。馬より。飛で。下り。李松が。馬を  
 は。ね。通し。も。この。鞍輪に。乗上り。丈八の。蛇矛を。振りたる  
 の。目を。驚か。有様あり。李松の。舞劍の。法を得て。元來。聞  
 ゆる。勇士なり。驟の。おと。くに。飛び。あがつて。透を。あらせ  
 せ。仰加奴。若たる。鐘を。壘み。打た。敵々に。砍つ。ければ。流  
 血眼に。流さ。し。甲の。袖にて。拭。んと。捲か。ところを。拜

み打に。躍りあがつて。撃ければ。さしも。勇みし。仰加奴も。兩つになりて。矢に。けり。されば。官軍勝に。乗り。虜兵の。機を。ぞ  
 裏ける。う。く。て。互に入。亂れ。面も。あ。ら。せ。戦へ。死。屍の。山を。なし。血は。川波の。如くなり。時。成梁。大音。あげ。また。な  
 し。か。あ。せ。退加奴。死を。諸共。と。契り。たる。將を。討せて。や。み。く。と。仇を。報せ。き。逃行の。猶や。處に。異。あ。ら。せ。い。か。に。胡  
 等。近。く。よ。つ。て。中國。遊擊。將軍。が。文武の。鋒。よく。見。よ。と。馬。り。か。つ。て。青。驪を。八面に。驅。廻し。偃。月。刀を。閃。らし。虜を。斬。こ  
 と。數。し。ら。せ。又。官軍。偏。裨の。大將に。渴。虎。賈。熊。と。云。ふ。者。あり。渴。虎の。臂。力。百。人。と。強。ぎ。鎗に。名。を。得。し。上。手。なり。賈。熊  
 の。方。馬。上。に。て。千。鈞の。弩。を。扛。て。其。上。手。聖の。射。手。なり。けり。この。兩。勇の。兵。だ。も。李。將軍。を。挾。み。遠。矢。を。放。ち。長。鎗に  
 て。四。角。八。面。衝。た。つ。れば。遠。き。敵の。矢。も。中。り。近。き。鎗に。買。かれ。さ。す。の。に。悍。さ。繼。人。も。進。み。か。ね。て。見。へ。に。ける。さ  
 ても。退。加。奴の。副。將。を。李。松。に。討。せ。李。將軍。に。き。た。な。ま。れ。怒。れる。眼に。血。を。ろ。く。ぎ。拳。を。握。り。牙。を。か。き。退。く。味。方  
 の。機。を。屬。し。後。陣に。扣。し。十。萬。騎の。勢。を。さ。し。ま。ね。ぎ。新。手。を。入。か。へ。攻。戦。ふ。成。梁。も。二十。萬の。殿の。兵。出。し。つ。息。を。も  
 つ。か。せ。防。ぎ。ける。う。く。て。三。日。の。闘。に。虜。兵。十五。萬。討。取。れば。官。兵。も。二。萬。餘。こ。う。喪。に。た。れ。折。節。大。雪。ふ。り。つ。き。馬  
 の。蹄。も。立。ざ。れ。ば。兩。陣。互に。引。退。き。師。を。陣。處に。班。め。置。た。明。も。く。春。を。待。に。ける。年。も。程。なく。新。玉の。二。月。初。に。なり  
 しか。ば。官。軍。には。北。京の。調。兵。加。り。日。々。に。著。陣。し。ける。程。も。渾。て。百。萬。餘。騎。と。聞。け。ける。さて。又。虜の。陣。處。に。い。沙  
 漠の。雪。い。まだ。消。ざ。れ。ば。故。郷の。往。來。道。絶。て。阿。魯。台の。援。兵。も。至。る。こ。と。能。い。き。去。ぬ。る。臘。月。の。戰。闘。に。十五。萬の。人。馬。を

興つて。勇心必もく下け。可ひくべらもきき處に。春來北京の調兵相加はり。官軍を以て百萬に餘りぬと聞傳へさし  
 もの虜兵氣も疲れ。心も慮して北へ行く。雁の翼に故郷へ。玉章もやと徒に。遠き雲井をなぐめやり。暮はぬ者いな  
 かりけり。うくて其儘戦つ。虜兵一人も通る者い有まじきを。邊加奴つくくと思索して。謀士速乃合を使とし。  
 兩國の和を請せける。官軍もも。馮虎賈熊出向て。迎へて由を尋るに。虜使が曰く。我國の大王。昔し成祖皇帝の封を  
 受しより。二百餘年。その歳々の貢おこたらせ。しかるに當朝に及で。國柄張居正。己が權をほし。まゝにし。吾大王  
 の使者を。奴僕に如く賤しめて。彼東の文章。大に舊例に違ひたり。且近年邊の飢民。多く吾部落を掠め取る。これ  
 に依て某等。數十萬の兵を領して。互に刃に血をぬるに及べり。竊に聞く。居正既に死して。姦惡の罪をまぬがれ  
 せ。子孫官籍を削られて。下民となる實に上天の罰するところ。誰かこれを快とせざらんや。然る上。吾大王。復  
 何の寛みをか存せん。さる間我をして。兩國の和を請しむ。怒動にころ脱にけり。馮虎これと子細に聞て。卒答しけ  
 る。國朝高皇帝。鼎を定め玉ひしよりこのかた。仁義を以て天下を統御し。恩を九夷に施さる。何ぞ外國の使を  
 賤むるの理あらんや。これ皆居正が跋扈より出るところなり。且邊民が犯せる地は。舊制に準ひ返し與ふべし。往  
 返數度にして。兩國の和を調へ。牛の耳を伐て。血を盃に滴しつ。千秋の盟誓となし。兩陣互に兵を回しける  
 宮裏四時嬉樂

將軍李成梁。總兵李松。海西の軍に討勝て。總將を和を請せ。北京として凱陣をゆ。しかりける形勢なり。萬曆皇  
 帝かたがりなく。御殿まして兩將に。厚く恩賞賜れ。御代に千秋萬歳と。上下をよめさむたりけり。爾しより後。邊  
 塞の烽火も断へ。南北の兩京に。文章事らさかんにして。春秋の鄉試に。英才を擢らる。出身及第の名臣。文章の  
 一家をなすと雖も。武事を兼知る人として。稀稀にようなりたけれ。かくて國家昇平のあまりにや。萬曆皇帝宴樂  
 と事とし玉ひ。北京の東。方十里の苑を開りせ。玉樓金殿を連ね。庭に人間未見の花木を種へ。水晶を沙とし。  
 琅玕の飾を構へ。中に數千畝の池を鑿て。河水を引き。海に珊瑚琉璃を以て。樓を造らせられける。され雁の足  
 驚。白鵝の翡翠のさ。波に戯ある。影。琴瑟箏簧の棹道より傳ふる聲。恰も蓬瀛の仙島に。天娥の降りまそが如し。  
 三千の宮女。みなこれ一時の國色にて。朝暮雲雨の交歡。實に太平の天子と仰ぐべし。春は海棠の御宴に。宮娃お  
 の花をかざしつれ。禁路の左右を擁ち行く。帝が。黄金の籠を攜さ。内より一つれ蝶を放ち玉へ。宮女の  
 奇楠沈水の名香を。焦る。許たきしめたる。か。しの花にてさしまね。蝴蝶は宮女の薫せる香の。醜態たるを追ひ  
 廻り。彼方此方に翻飛し。遂に止りたる花を。驛に御幸ありにたる。これを蝶幸と名づつらる。さて又九夏の納涼に  
 け。青雀の樓船よりされ。御池に消遣し玉へ。宮女の。玉をむむむく指を以て。手ぶとに描金の  
 字を。音も静に風流る。夏な。夜半の水の面。底さへ見ゆる月にて。君また青羅の。螢を放ちやり玉を



宮人色をあらうひて、普散露。梅花灑なごの露を滴て替の花に透で芳らじと。手々に輕羅の小扇たて。操てこれを  
止んとせ。燭たすく。替の。花に點せし其人。其夜の寵を得られける。さればこれを、管幸と名づけられしも。こ  
とありなり。秋の時雨の染て濃き。木々の梢の紅葉々々。情の色に比て。今一しほの御遊なり。帝沈香亭に出御あり。  
唐の王建が作りたる。宮詞百首の秘句の詩の上の二句を、數々の。桐の廣葉に題せられ。御潭の源より。流させ玉  
へん。宮女は又下の二句を題して。水簾に依り。露ひよれると合せて是を取らけり。數を競て合せ取る。中に一  
首も多かりし。方へぞ幸なりにける。紅葉と色をあらそへる。宮女は流る。桐の葉の。波に浮ふを咏めやと。幸を望  
む姿を。君亭上より御覽せらる。實に紅華と聞たる。名も珍き御遊なり。宮廷の桐葉を。錦の簾も貯て藏く。これ  
を實とす。みれを情紅と名づけたり。さて二冬のさむき夜に。浴殿に御し玉ひ。驪山の温泉に辱らへて。香湯を室に  
港へ。數の宮女と諸共に。同く浴し玉ひけり。美人の粉膩とろろつ。湯も和し。顔に流る。海棠李花の雨を帯  
び。結び初る如くなり。雪の朝は池水に。群いる鶯鶯のむつれあふ。つる中を打狹み。九華の張の外にして。麒麟  
鳳凰の朝儀を燒き。四方より暖氣を催して。どながら春の如くなるに。宮女と共に錦繡の褥に坐し。黄金の餅に琥珀  
の酒を温りさせ。鷹取も事終り。手合させ。のどかまりに。數多の宮人醉倒れ。や披に扶け起さる。は。玉山の額  
る。どもの。聲てこれを謂つべし。美人と共に香湯に。戯れ玉あゆえなれや。鶯鶯會とぞ名づけらる。かく數々の宮人

の。中にも鄭妃と申せし。第三の皇子を産玉ひて寵幸他人に異なりけり。總て三十六宮の嬪。皆芳らじと容を媚  
び。幸をこころい求めけれ。帝もとより色を重じ玉ひつ。御情の雨。内家殿を懸はしけれ。腹腹に。二百の皇子を  
予誕生ましくける。昔が今に至るまで。うゝるためしはよもあらじと。百官これを壽あさて。麟趾益斯の歌の聲。  
洋々として耳に盈つ。然れども。二十年よりして後。兩京の地震たびくにて。山崩れ川潰え。民庶心を安んぜせ。  
如何なる事か出来んと。思ひ煩ふ折からに。北京の街中よは。倭國の軍勢攻來り。山海關より討入よし。遼東の人民  
の。一人も残る者あらじと。口々に云ふ程ころわれ。五年七年このかたよ。善へ置し醇酒も。何にかりせん香盡せと。  
是非をもどかぬ下民。天地もかへる心地して。兒を負ひ親の手を引て。山に登て害を避け。數日里へ下りざり  
けり。其外の怪異數多たて。一一しるるに暇なし。されり都下なる買民ども。貨物を易て金銀を。遁逃したくも。貯  
へける。姦商は此費。に乗貨殖を事となしけれ。物價日々貴とふして。下民手足を安んぜせ。離云ふとしもなけれ  
ども。善からぬ事のみ私語て。音にかける世となれり

朝鮮國の兵防倭

萬曆二十二年の春。日本の將軍。關白豐臣の秀吉。兵船數百艘をつくりて。朝鮮國へ押寄せ。釜山浦を打圍み。散散  
にこそ攻たりけれ。國王李昭陽防ぎ得ず。義州をさして落て行く。倭兵はこれに力を得。溟陽城を攻落し。鴨綠江を打

渡り。大明の地を侵さんとぞ。御油断あるへからずと。飛機の急を告ること。櫛の齒をひく如くあり。萬曆帝の恐れをなし。急に總兵祖承訓に。二十萬の兵を添へ。江を渡りて防がしむ。倭將の勇氣盛にして。官兵もまた援ひ得ず。大に敗れて引退く。かくては。ゆゑしき大事と。再び詔せられ。將軍李如松。經略應昌に。百萬騎を領せしめ。平壤道に屯るして。倭國の兵を予防ぎける。倭兵よく驍勇を振と雖も。明兵も對陣し衆寡敵一かたく大に敗北す。李如松の勝に乗り。碧蹄館まで逐かけたり。されども倭國の兩大将。加藤小西等が。刀法張飛關羽をも欺むくの勢われ。李如松も却て官兵を喪とを恐れ。とどろきと遠く。趕ゆかき。麾下の諸將に相議り。急ぎ軍と班とめ。人馬の息を予休めける。斯て明年になりしかば。朝鮮の説客沈惟敬。倭將小西をいざなひて。日本の封を請たりしに。朝廷群議まちく。たて。關白豐臣秀吉を。日本王に封せんと。君臣どもに一同と。禮部の官某のみ。うけがりを班を出て曰く。日本もとより國王あり其國を治る事久吾國朝の始め。僧徒の往來して。云るところなり。然れども今うれ王の存亡を知らず。所詮別に字を撰んで。封せられ候なり。可然とこそ。奏一けれ。萬曆帝聽し玉のま。遂に日本王に準せられ。臨淮侯の爵。李宗城を正使とし。楊方亨を副使とし。沈惟敬と同じく。對馬島に予渡りける。太守義智これを館し。日を移して款待もてなしけれ。爰に如何なる謀計者にか有けん。一人の倭奴出來り。宗城が從者を誑かし太守義智心を變じ。殺害せんと欲する由。賊しやかに云々れば。從者驚き宗城に此由かくと告にけり。宗城大に懼をな

し。とる物もとり敢て。聖書を捨て夜船に乗り。後をも見せまて逃歸る。萬曆帝怒てこれを牢獄し。復楊方亨を正使とし。沈惟敬と同じく。再び渡海せしめらる。倭將これより兵船を織ひ。軍をこころは班めけれ。其後倭國の大勢。また朝鮮に攻來る。兩使と專對の功多く。手を空しあして歸せり。されども帝に此由を有のま。奏しなべ。如何なる目にか達せま。兩使心を一つにして。詭り報じ誑奏して曰。倭國とてに封を受と雖も。朝鮮往て謝することなきを責む。この故淹く日本に留事かくの如し然に帝は關白秀吉が。表文を讀に至て其體裁。人臣の禮なきを疑ひ且。拷問して明白せしむ。方亨痛楚また耐えずして。有し次第を白狀す萬曆帝聞召。大に怒り玉ひ宜く國を辱しむるの律よしたかへとて。沈惟敬を引出し。斬罪してころ捨られけれ。さて又朝鮮加勢の事。延引あるべからずと。僉議評定まちく。にて。急ぎ邢玠を經略とせ。楊鎬を經理となし。麻貴劉綎は。將軍の印賜はりて。百萬餘騎を引率し。朝鮮援ひよ打立けり。かくて兩將二手にあり。麻貴と忠清道を防ぎ。劉綎は黃海道を予支へける。各兵を進せて。倭兵の軍營に逼り攻む。首級を得ること。太だおほし。時に日本關白秀吉公。伏見の城に薨去なる。遺命を任せ。朝鮮に在し諸大将日本へ先をわらうひ凱陣と。始末五年の取。くるしむ居たる朝鮮の國王を始め。民百姓に。たるや。よろこびの眉をぞひらさける

楊應龍 却二西蜀

朝鮮已に日本の兵歸國して。官軍京を凱陣すれ。萬民しづらく安堵の思ひをなしける處に。又明年二十七年に。楊應龍楊朝棟父子。西蜀にたて籠り。州縣の人民をわびやかして奪ひ取り。或は百姓の妻女を奸淫し。惱ましむるの旨。蜀の令より急と告ぐ。朝廷百官同く僉議あり。將軍劉綎に數多の軍勢相添て。西蜀へころ向られけれ。劉綎部下の將卒よ。誓をなして云く余聞く。賊兵甚だ無勢にして。且劫奪の兵なれば。心に究みあり今よく官軍進ま。一戦討ちさらん。一步も退くこと勿れと。士卒を勵し再ひ下知し。諸將道を相分ち。四隅に陣處を構へつ。賊營近く運る然と。ころに。楊朝棟の小勢にて。逆毒にし不意を討つされども。官軍大勢にて。左右より之を夾む。短兵急に攻ければ。朝棟とつり身を免れ。父が陣處に逃回る。官軍すかさず逐つめ。もみだもみて攻にける。父子諸共。又防と雖も一陣とるに敗るれば。殘黨全たうらたして。和睦を請んと疑議するを。劉綎意決斷し一人も漏さず討取と。聲々によばつて。推倒しての首を取り。引寄ての擲取る。應龍父子みれを見て。俄に恐懼戰慄て。蜀の嶮阻を頼み早く山關に引退さ。此を詮と守りける。夫蜀山の嶮難と申す。萬嶮嶮々として。天をさしりさみ。中に一線の道通す。窄きこと。左に擁ひたる物を。右へ替ること能ひ定。七盤り九折りのさかしき。鳥さへ通ひ難と。かや。楊賊こへに引籠り。この嶮難を前に當て。石礮を備へ置き。鳥銃を放つこと。篠の葉末をさらく。はしる雀の數よりも。尚しげれば。官兵も。或は撃れ。手を負て。進まんやうななりける。劉綎この由見るよりも。猶士卒を下知



して曰く。此嶮關の彼前門なり。余想ふ。敵の此前門の嶮さを憑り。左右の必せ慮るべし。た。問道より攻よとて。數萬の兵を四路に分ち。猿と放ち其尾を。暮ひ猶山深く攻入たり。猿の木傳を程なら。行をぬ事。よもわらじ。なだ人として禽獸に及ばぬやうや有べきと。諸軍互に機を勵まし。轟に手をかけ。縦角に足を。またて。かつき連れ。杖を嚙で押寄せ。案の如く賊陣には。手勢僅に。五千ばかりの軍兵を。嶮關にくわり置き。應龍夫婦酒宴して。悠々として居たりけり。時に左右の問道より。一度にせつと。門をあげ。數萬の鳥銃放ちかけ。先を争ひ切て入る。思ひ設けぬ事なれば前後かかくに動轉し。女童部の哭叫ぶ。とも有ぬべく見えにけれ。嶮關に支へた。兵ども。返し合さんとすれば。前門

を官兵破て入んとぞ。ふくを守て破られまど。防ぎ戦を其ひまには。問道より奇たりし。官兵雲霞の如く起り。左右一時に攻近づく。應龍今の叶はまど。只一筋に思ひきり。妻子に向て。涙をながめて曰く汝等いともかくも。心に任せ討らあべし。必ま我事思ふなよ。人間の歡樂これまで也と奮然として出にけり。楊朝棟は初より。嶮關に向て在けるが。前後の敵に來れて。進退こゝに谷れ。大よ怒を。齒がみをなし。大の戈を打揮ひ。一方を討破て。落て行んと。のけ出しを官軍これを取圍み。裨將の手たぞ生擡ける。さて應龍の。兩人の愛妾と。堅く室を閉ち。火をかけて。自ら縊死にけり。官兵すかさず馳來り。烟の中に飛入て。殘る敵を討て捨て。妻の田氏の外に。賊黨百餘を生擡て。俘をば北京に獻り。首の各九邊に懸け置け。遂に其地を二郡に分け。蜀に屬する所をば名づけて。みれを遵義とし。黔に屬する所をば。平越と名づつ。國平らかに治まりて。民庶心を安せり。

僧達觀坐化獄中

萬曆帝明墓に。一向酒色にのみ溺れ玉ふ故天災地災異バくなれば萬民心を安んぜせこれに因て朝廷内外の羣臣の上疏しきりにして早く皇太子を立玉ひて。臣庶の望みを安んぜんよとを請れける。帝如何なる歡慮やらん。容易く允ま玉ひざりしかども。數年の上疏やまざりければ。二十九年の春詔わけて。皇長子常洛を冊立して。東宮に移させ玉ひけり。三十年の秋。萬曆帝暴卒に御慟ましくしに。倭幸の輔臣沈一貫を。自ら寢殿に召れ。東宮を輔

佐せしむるの口宜あり。又諸州金銀礦の税貢を罷め諸禁を釋さるゝの由。こまぐとの救われ。一貫即ち千萬歳を予呼にける。然るに翌日帝の御慟。思の外又安うりし故。自ら綸言を悔ひ玉ひ。再び前の口宜と索玉ひけり。大監田義暎て曰く。綸言汗の如く。出て再び回るべからし帝大よ逆鱗あり。御手に刃を握て。是を伐んとし玉ひけり。田義少しも驚かぞ目も瞬るか。居たりしが。一貫腹ひ恐れつ。口宜を繳し奉り。詔諛へるありさ。群臣これを見。冷笑をぞしたりける。うの頃の政嘆かききよと多かる中。國々の税監より。金銀珠玉を取集り。官庫に納め進むるの。人馬道中に相繼て。庶民の苦み痛むこと。水火の實に異ならず。侍郎郭正域。大監陳矩等これを聞。わ。奸臣の世を亂す。もと聚斂より事おこれり。車に載たる財寶之。皆是民の腴なり。臣としてこれを見るも忍ひんやと官庫にゑと納じ。中途よりして税貢を。國々所々へ返し與ふ。されども聚斂やまざれ。陳矩のこれを愛へ年貢を厚かして。民の患を知ざれば。國の本を動かさなり。其率量り難ま。と諫奏すると頻りなり。内庭に給事錢夢阜。輔臣沈一貫なぞ云へる臣有て。倭幸を得て。只酒色とのみ勸め奉り。ともに恩賜を貪りければ。六宮の豪華に。官庫の金帛は。日々夜々に減る故。諸州に税監を置き。寶を斂めさせられける。忠義の臣は亡國の基とこれを打喚た。上疏し。諫め奏すること。數々に及べども。倭臣間を隔れば。帝之夢にも知玉ひせ。忠言も唯徒に。達せざるころ。うたてけれ。かくて倭人幸を得て。朝政私多ありければ。人々心を置合て。眉をひるむる者多し。或時匿名書を諸官舎に落







軍となま。邦免公を副將軍とし。六王子附馬鐵を龍護將軍。四天王丁知彪を豹略將軍とし。吾金王を左先鋒。海利王を右先鋒とし。烏金王を虎賁將軍。安大人を右監軍。健勒王を左監軍。貝勒王を開國總軍師と定め。達素伽。勒從經。阿克商。丁黑山。馬德光。王老虎。金鼓山。部故山の裨將三百五十四萬の軍兵を集めて。日夜に兵を煥鍊す。貝勒王重ねて奏して曰く。軍旅の天の時地の理人の和の三より先なるりなし。天學の程度の吾國の業なれば。吾何ぞ中華の人に讓らん。地の理の我よく輿圖を考がへ。明の十三省を掌の内に握る。臣死を盡し。器を惟懼の中に運らし。萬民を懐けし卒を調和せよ。吾大王の鼎を定め玉事。指を屈して待つべし。惟功の速やかならんを欲し玉ので。徳のたまねからんことを欲し玉おべし。大器の曉く成るるころ承りねとぞ奏しける。

清兵擊撫順城

貝勒王の三百餘萬の軍兵。よく騎射歩戰火水の兩攻を精練して。天命元年九月に。建州國を出陣し。たやすく萬里の長城を踰へ。月を経て遼陽の北鎮なる撫順城を取圍。城中に。李永芳。僅一萬の兵を領し。成りしかども。清兵三百餘萬。敵とべからざれば。自ら降旗を建て。鎧を脱いで降人に出さば。國中の騒ぎ人民怖るること限なし。貝勒王の城に昇り。百姓を安んじ。年税を免し。白銀二十萬兩を出し。城下の民に分ち與ふ。且つ李永芳か女を韃靼に送り。烏金王か妻となし。清兵を禁。玄城内の一草一木をも伐しめず。若し他の妻女を奸淫せば。別刑に處せしと嚴かに法をぞ

正しける百姓の妻無に。建州人の女を嫁ま。夫なき女の。建州に送り嫁し。兩國の婚姻と成と。撫順城の人民久しく明の苛政に苦しむ。調は惱まさをなると。思ひざる清の新令よく貧窮を賑やし。各々兒女に婚姻を定めしに由て。ひとしく萬歳を呼びにける。かくて北京より。韃靼を襲ふと聞へけき。萬曆帝大に驚かせ玉ひ。急に二十萬の援兵を召し募り。都御史李維翰。總兵張承胤を兩大將とま。清河關に屯してこれを防がしむ。清の塞には貝勒王。これを降將李永芳に譲る。永芳が曰く。明の兩將自ら勇を恃み。遠き慮ばかりなし。我ひとつの計を出し。敵を引寄せ。網裏の魚となさんといへば。貝勒王これと然とし。李永芳檄文を書て。明察に送る。維翰。承胤これを披覽るに。永芳原より明朝に七の密あり。今太清の恩に歸す。汝等早く降人に出て命を全かせよと云やりしを。維翰の檄文を擧ぎ捨て。直に數萬の人馬を引具し。大きに怒て進發す。李永芳の清兵二十餘萬を領し。清河の東に。へたり。張承胤の白兔馬に黄金の鞍をか。先に進み大音響て曰。這廝馬。俗にあいつと。李賊人面獸心。累代の恩をわれ。利を貪り國を賣る。何の面目有て明朝の忠臣に向かど。言いもあへず。諸卒に下知して。戰はしむれば。李永芳の羽軍の團扇を指揚て軍兵を進しむ。兩陣互ひに入亂し。火を散して攻戰ふ。射違ふ。鏑矢の音。鉄砲の響。呼叫が勢ひに。山鳴り谷應へて動搖す。清兵の射手を翹へて。毒箭を雨の如くに射かくれば。明勢の鎗も長じたる者ども。馬上にて。かた出て。歩立の兵を縱横無盡につきかくる。雙方其弱をかへり見ね。血の流て河となり。屍ねの積で山をな



ぞ。清の監軍安大人の百餘人が力を具し。一丈三尺の大戟を揮まじし。班馬に打乗。承胤に向ひ大に罵りて懸よれ  
 ば。承胤一丈の縁沈鎗を横たへ。赤驄に鞭打てたし合ふ。兩勇人に勝れたれば。十餘合の戦いに更も勝負の見へ  
 ざりけり。清兵の射のくる毒箭。雨の如なれば。承胤が馬の袋を著たるに異ならせ。其毒四の蹄に爛れ入り。足並み  
 次第にまどろになれば。安大人是を見て。長戟を打振り馳よりて。熟地暗に衝ければ。大地へかつつと倒れにけり。  
 清兵いさみをなし。明の大將を討取りたりと呼ひる聲。山河も崩るばかりなり。維翰の副將軍を討せ。大きに怒り。  
 魚鱗鶴翼一齊におめき叫んで殺進む。清兵數十萬の多勢も。維翰必死の兵より當り難くや思けん。永芳にわか馬  
 を回して敗走す。明兵の大きに機を得逃るを趕ひ戦ひ行くこと二十里。維翰の馬を留め遠く趕ば必らず敵の計に中  
 るべしと不制止なる。然れども勝に乗たる數萬の軍兵。擧るとも留まらざり。又十里ばかり過ぎて鉄嶺の麓に至れば。  
 早夕陽も西に落ち。遠寺鐘の聲も聞かると覺へしが。左右の嶺より玄武朱鳥の兩旗風に翻へり日に映つる。清の左  
 先鋒吾金王。同じく右先鋒海利王。紅錦の戰袍を披掛し。各十萬の兵を率ひ。問道より横ぎり討つ。維翰の陷井にお  
 ちいるを悔み。後ろを省みれば吾金王。玉蛇の兜に玄豹の鎧を著し。甲兵の雲の如く群がりたり。明兵の終日の戦か  
 ひよ。人馬大いに疲れたるに。清兵に圍まれ馬に飲かふべき地もなく。機を奪ひ。弓箭を持たながら切て放つべき力  
 も無し。清兵の兼てまふけたる計なれば。諸軍を屬まし殺倒す。こゝに於て數萬の首級をぞ取たりける。御史李維翰

の海利王が裨將李表のためにぞ生捕れける。明軍の兩大將を喪ひければ數萬の殘兵或はにけ去り。或は降人になる  
 もあり。貝勒王の幕中に在て大に喜び。手の舞足の蹈を知らせ。乃ち三日を経て大將軍攝政王を清河城に請し。萬民  
 を安んじ官庫におさめ。たくとへたる賦税の金銀を分ち與へ。年税の半分を免し。其餘の貢納とし。吾大王の恩を  
 謝せよと諸郡に觸たりければ。千村萬落の保正里魁計らざるの免税おのゝ清に歸服して。猶また撫順の法に隨ひ  
 兩國の婚姻を結ぶ。百姓等さしも服しめたる難人なれども。其免税の恩に懷き。村邑より簿帳面を以て男女を記し  
 婚姻を求む。貝勒王の藝術の成れるを喜び。丁黒山を經國に使ひせしめ捷ちを告る疏に曰く大王既に萬民の爲  
 に義兵を揚ぐ。維天これと資け。御旗の向ふところ。殆んど破竹の勢ひあり。征して伏せよと云ことなく戦て勝すと  
 云ことなし。千里一步の始め。撫順清河の二城を赤手に得たり。臣退ひて思ふ。向後三五歳を歴ば。兩國婚を結ぶ  
 の民庶。子孫まさに蕃殖くすべし。然る則ち吾清國の兒。他の中國の苗。他の中國の兒。吾清國の種なり。兩國の親  
 し。恐らくこれより過たるりなし。惟この城に據り敵を引て相戦か。大ひに吾軍に利あるべしとぞ。奏しけ  
 る

劉廷決策進兵

北京に速の役に維翰承胤打死にし。二十萬の官兵ことごとく離散されば。都下の騷擾聲へん方なし。時に東方夜

夜白氣天に亘たる。使きこと百丈をかり。監官をして星經を考ふるに。黃尤旗と云へる星よして。兵の象とぞ奏し  
 たり。又畿内の地の山家田園を論ぜず。土に毛を生ずること髪に如く。其色或は白く或は黒し。長きこと尺に盈つ是  
 た田て占者と召され。占りせられ々々。淮南子を引て曰く地生毛兵興り民不<sub>レ</sub>安と。奏聞したまわれ。萬曆帝大  
 ひた恐れ玉ひ。臣下百官を召しめつし商議し。李如相を總領兵杜松を都督とし。山海關に屯ろま。榮國柱劉綎を遊擊  
 の兩將軍となし。兵部侍郎楊錦を遊の經略と定め。遼の左右より二百萬の兵を進發せしむ。夫れ遼の國と申の東  
 の鴨綠江。朝鮮より西の山海關。朝鮮の界ひに至る。南の旅順口。山東の界ひ北の開元女直の界ひに至る。方千餘里  
 まさに中國北京の左の臂と頼のゆる處にして。虜兵これを犯す時。此に狼烟をめぐれば。滿鎮より援兵を出し。山海  
 關の間道より馳せて。遼を防ぐ。古への軍例も准す。今又賊と防せん。清兵三百餘萬の。清河城を本陣とし。半  
 年に過れども。出て戦かふことなく。ゆるやかまう扣へたる然るに。建州梁顔の賈の。常年に夷落も通す。互に貨  
 市をむつまし。かまうたるを彼等に賄なひして。明軍の弊へ通じ。消息を聞て告させける。北京に給事の方從哲の。軍  
 務を知らせ檄を馳て戦かかざるを責め。且將軍の怯弱を尤め。軍糧を費やせりと謂て警りける。經略楊錦の朝廷の  
 催促を得て策を決し。兵を四路に分て進む。清河城に。且勸王早くこれを知り。兼て數萬の兵を伏せて。これを守ら  
 しむ。明の都督杜松の。十五萬の兵を率ひ。五嶺關を越へ。渾河に至る忽と。清の龍護將軍附馬鉄豹。容將軍丁知彪

釋將馬德光。同じく王老虎。十八萬の兵を排り。是を遮る。杜松の敵に橋先を奪ひ。自から鎗を提さげ馬をおせら  
 せ。七重八重の圍みを突出て。大將を目的けさま向ふ。豹署丁知彪。丈八の長鎗を取のべ叫てゐる。兩將同じく  
 馬上に達し鎗法を善すれば。衝かくれば開き。進め退ぎ。未刻より。酉の刻に至るまで。勝負を決せ。丁知彪の  
 北胡の驍勇。齒ひ三十に盈き。杜松の五十に過たる大將なれば。力ら竭き血を吐。馬より墮てぞ死にける。官兵大よ  
 敗れ。刀傷する者其數を知るべからず。榮國柱將軍の。二道關より向ひけるに。清兵兼ての備へ殊更整る。朝たに。  
 渾河の勝勢加ふるほどに。榮國柱が十五萬の兵も半に討れ。半の四方へ逃さりぬ。國柱のたゞ一騎となりて本營に  
 走り廻る。劉綎の軍務に馴たる老將にて。必き敵の備へ有んことを量り。間道を百里ばかり行き過し。賊軍の處を討  
 んとす。清兵に思ひぬることなれば。衛護の兵敗走す。明兵の勝に乗り直ちに十餘寨を奪ふ。清の龍護將軍附馬鉄  
 豹。敵の前後を圍れ。進退こゝに谷り。自ら馬を回し。劉綎を望み青龍刀を振りたて切て廻る。明の先鋒劉招孫。やつ  
 先に馬を出し。偃月刀を右手の脇にかいこんだり。清の釋將郎故山も同じく偃月刀をかざし。鐵塵になれと斬まか  
 くる。劉招孫ひらりとばつし。横合より偃月刀を入れて。兩將互に虚と伺がうの刀法に。章駘天。毘沙門の天より  
 降るりと。わやしまる。劉氏に目明らかた手快き將なれば。遂に故山を兩斷に斬てぞ落しける。是を軍の始として。  
 明軍三十萬前後より呼び叫て斬り進む清兵二十萬大に。亂て見えければ。將軍附馬鉄豹これを制し。陰谷の洞門に師

を引き。鉄炮を響し。これを防ぐ。劉鉄も早朝より斜日までの戦ひに。人馬共に疲れなやとける故に。敢て争う。いと  
 るせき。三十里ばかり隔て。兵糧を遣ひ。士卒を休息せしめけり。斯て貝勒王の自から十萬騎を率ひ。撫順清河の軍  
 民を交へ。副將郭亮公を殿後とし。相圖と定め。これを援けんと計りける。詰朝辰の刻。かり。劉鉄の先鋒劉招孫。  
 同く買庭柯。十餘萬騎を鳴し。鼓を打。陰谷を圍。洞門の清兵と鏖。せと喚。り叫んで。攻たりける。洞中に將軍  
 附馬鉄少しも驚かざ。鳥銃を戦れの如くひりかし。敵の氣を奪ひ。敢て師と出さ。士卒を慰めて曰く。凡る戰場。  
 の子。屍を沙場。嶺谷に晒す事。尋常なれば。思ふべきに非。余こゝに厄せらる。何う久まらんや。大軍師貝勒王  
 必らず來り援はん。火藥の有ん中。鳥銃を鳴し。防せぐに如し。洞中水乏しければ。大軍の渴せん事を怯ると謂て。歩  
 兵として氷を運べせける。官兵矢種を惜ま。雨の如くに射かくれども。清兵一騎も出合ひ。左右の礮。礮壁を立に  
 同。惟一線の路。洞門より陰谷に通。劉鉄も計となく。軍を班めて。暫く本寨へ回らんとす。したりける

貝勒王救附馬鉄

明の經界楊錦の軍糧を敵よ渡し。四路の備へ大に破れ。三路の兵のこりなく討たれ。李如相等箭を捨。戈を失。ひて一  
 騎のと全たきを得たり。唯劉鉄が向ひし。寨口の消息。一月に隔れども。是非を聞くこと能ひ。楊錦自ら十萬の兵を熱  
 下し。これを援けんと欲す。劉鉄の清和路を七重八重に寨を打ち。陰谷の兵糧の路を絶ち。清兵を餓死せしめんと計

なる。洞門の兵は清河の援兵も至。兵糧すまに盡なん。と。これども。難糧の習。て尋常に。茹草。嚼血を以て。俗と  
 それ。稷の乏きを憂へ。陰谷中の。麋鹿。免。猿。などを。獵し。士卒の飢を助け。る。鼠。夜。明の。寨。中の。選卒。山々に  
 篝の燃るを告げしか。劉鉄急。に人馬を。裝。ほ。自ら。甲冑を。抛。掛。十五萬の兵を。二。つに分。ち。劉招孫に。七萬騎を。與。へ  
 陰谷を防ぎ。自ら八萬の官軍を率ひ。買庭柯を先鋒とし。西山の半腹に出で支たり。東や。明。なん。と。とる。に。清兵お  
 の。一。枚。を含。む。雲の。袖。を。攪。ざる。が。如。く。山を下る。官軍は。遂。なる。嶺。に。敵。を受け。容易。進。む。べ。から。せ。と。て。扣。へ。たり。  
 貝勒王の敵を直下大に喜。び。彈丸の。坂。を下る。が。如。く。に。數。萬の。騎。射。先。を。争。ひ。放。り。毒。箭。の。飛。ぶ。よ。霜。風。に。落。葉。の  
 舞。に。似。たり。官兵大に。亂。れ。立。ち。聲。へ。き。三十里。計。り。引。退。す。劉鉄怒。つて。制。す。れ。ども。洪水に。堤。の。潰。る。の。如。く。と。い  
 む。れ。ども。留。む。べ。から。ざ。清兵の。機。に。乘。じ。斬。り。進。む。募。地。に。清。路。近。く。よ。せ。來。れ。ば。劉鉄が。八萬の。兵。も。本。寨。を。支。ゆる  
 こと能。ひ。せ。して。洞門に向ひたる。劉招孫。と。ひと。つ。に。成。て。これ。を。防。ぐ。んと。欲。す。清の。假。裝。ひ。の。軍。兵。思。ふ。ま。く。に。明  
 軍に。打。交。は。り。洞門に至り。射。書。を。放。ち。援。兵。向。へ。と。告知。す。龍。護。將。軍。附。馬。鉄。大。に。喜。び。時。こ。う。到。れ。討。て。出。よ。と。石。炮。を  
 響。か。し。十五萬の。兵。一。同。に。叫。び。出。づ。貝勒王は。後。より。纛。を。打。鐘。を。鳴。し。三十萬の。新。兵。聞。を。あ。げ。て。殺。倒。す。劉鉄。劉招孫。  
 買庭柯。も。こ。ゝ。を。せん。と。士卒を。屬。せ。し。相。戦。か。さ。然。る。に。官。軍。の。中。俄。に。同。士。戦。し。大。に。陣。を。亂。し。ぬ。れ。り。劉鉄。大。に。怒  
 り。て。こ。の。何。れ。所。為。や。敵。前。に。私。の。仇。を。報。せ。べ。から。ず。と。叱。し。これ。を。制。す。元。來。撫。順。清。河。の。軍。民。を。貝勒王。が。計。こ。と

にて。官軍に交へたれば。劉綎が知らざるもことなり。道の僞兵を成し民なれば。貳心なく斬入たり。官軍の敵の計に中り一時に討れ屍の溝壑を填丘となす。附馬鉄が勢の員勒王が援兵に。虎口の圍を脱し。劉招孫を討とり。劉綎の數箇所の疵を蒙り。遂に撫順の民に打たれたる。賈庭柯の軍驍にして雜兵と共に逃たりしが。毒箭の箇みつよく。終に血を吐て死したりけり。楊錦の劉綎を救ふんと。紫口に趨むく處に。官軍早く亂れ。大將戰死し。敗兵離散すれば。賊衆の勝に乗したるを。十萬の官軍を以て。搥ひしがるべくも非ざれば。亦引かへ本寨を守りける。北京には百官群議し。遼の經畧を去く。半年の兵糧を費やし。たゞ兵を進むるに及で。軍機密ならざして。敵に泄し。三十萬の兵を喪ふ。杜松劉綎以下の諸將戰死すること。渾て楊錦が罪に歸して。萬曆帝逆鱗ましく。楊錦李如柏が官を削ぎ民となして。郷里に追下し玉ひけり。

鄭芝龍爲遼經畧

萬曆帝の遼の敗國家の禍を憂へ玉ひ。文武の群臣と共に。遼の經畧を搆み。商議し玉ふ。御史楊漣奏して曰く。臣竊に天下の材官を數へみるに。目今關の總都督。鄭芝龍なんと武畧文韜まことに萬人の敵と謂つべし。彼れが家系を審びらかまするに。父の紹祖世々。泉州安南縣に人なり。父泉州の庫吏となる。太守蔡善繼が宅と家相望ふ。鄭芝龍十歳の時に賊かれに石を投て。太守蔡公が頼に中つ。公怒つてこれを擒へ。罰を行ないんとするに。其妾た容ち秀麗なるを。見て笑て曰く貴人の相ありと謂てこれを釋せ。數年の後。芝龍其弟芝虎と同じく流浪し海島に入り。顔振泉と云へる海寇に屬し。盜を爲す。後南轅國に行き。火攻を學び。日本に渡り舞刀の術を鍛鍊す。顔振泉死するに及で。賊衆を統ぶる者なし。一人を擇み長とせんと欲して。定むるに能はざり。因て衆の盜天に祈り。米一斛貯り。劍を挿こみ。各々是に向ひ拜し。劍おどり。勳を天の授くる所なりと誓ふ。芝龍再拜するに及で。劍自のら躍りて地に落つ。衆盜みなこれを異なりとし。推し魁とす。關の海上に縱横されども。官兵も捕あること能はざり。遂に巡撫使これを撫け。芝龍を關の總兵遊擊となさん。約するに及で。弟鴻逵。芝豹と共に降る。其仲芝虎の先だつて死す。芝龍よく海情を知る。閩浙の海寇皆故る。友。又門下より出れを。招撫する。の後も海上の粟船。及び商船芝龍が免せる旗を得ざれば。往來すること能はざり。一船毎に三千金を納む。歲々の會計其幾千萬と云ふを量難し。此を以て家富國に敵し。自ら泉州安平鎮に城を築き。海を府の内に引。船を泊む。其城の兵もの自ら糧を給げ官より取らど。旗幟鮮明にして亂れず。戈の利甲の堅し。海寇芝龍が檄をねらること神の如し。故に八閩鄭が一旗を以て海寇長城とす。芝龍原より驍勇にして義と重んじ。海陸の戰さに慣れ。寇を禦くの術呼んで。飛虹將軍と名ど。彼を辟れ遼陽と鎮せしめ。恐らく。職を誤らじ。萬曆帝大に喜び玉ひ。旨を降せ。鄭芝龍の速やかに詔に應じ。自ら三千の兵を率ひ。泉州より北京に至て。殆んと一萬里の道路を。兩月ならせして來る。帝乃ち詔りを下し。都御史となし。兵部侍郎

を兼ね。透の經畧となさしむ。芝龍諶て曰く。征伐の其土を安じ。其民を賑すを要す。古より匈奴の寇亂百たび戦ひ。百たび勝も。終に和を講ずるに過ぎ。これ歷代史臣の記するところ。臣何をか言ん。今魏粗始めて國を開き。元を建るに及んで。官軍急に清河撫順の恢復を計る。飢たる虎に狗を飼ひ如し。人馬費やし盡すとも厥功成難し。臣竊に謂ふ。官軍たり。透の成を嚴かにし。賊の倦るを俟ち。恢復すべし。奏す。帝これを善とし。尙方剣を賜ふ。芝龍重て奏して曰く。透の厄せらるる。肩を燃ぐ如し。忽かせたすべからざ。官兵の心折け。賊兵氣さかんあり。惟城民の變ぜんことを恐る。内庫の銀四十萬兩を下し賜ひ。透民を撫せんと。請受て北京を辭す。司業張詮京兵三千を以て行色を壯にす。芝龍の性急なるが不日に遼陽鎮に至り。官軍の賞罰を正し。野に糧を設け。死亡せたる將卒を祭り。軍民に四十萬兩の銀を分ち與へ。大水と引き濼を深まし。石を壘。垣を高かす。策ことを定め。城を守る。透民の始めて生たる心地せり。

兩皇隔月即位

萬曆四十八年七月十四日。帝俄に崩御し玉ふ。百官の哀し。雲慘と雨霽ふ。諡して顯皇帝と曰ひ。廟を神宗と號す。八月朔日。皇太子位に即玉ふ。詔り降り。銀一百萬兩を遼東九邊の軍民に賜ひ。諸州の礦稅をゆるし。乃ち泰昌と改元。元。遺詔にまたがひ。鄭貴妃を皇后に封ぜん。命を。禮部の官。例を。めらため。允らさ。泰昌帝。東宮に在せし時。

より。色に淫し玉ふ。鄭貴妃より美女四人を送らると。雖とも。李進忠と云へる。佞臣が妹。李選侍とに寵を得れば。進忠が權盛にして。帝登極。即位の。後。纒か十日に。盈するに。朝廷に。政。厲し。賢を。妬み。佞を。行ふ。方從哲。これと。徒黨を。結び。權を。乘る。八月。帝の。り。ろ。め。の。御。腦。み。十二日。に。疾。を。力。め。朝。見。を。受。け。玉。ふ。に。聖。容。に。り。か。に。減。る。へ。させ。玉。へ。ける。十四日。に。内。醫。崔。文。昇。を。召。れ。藥。を。進。む。これ。通。利。の。劑。な。れ。ば。驟。に。數。度。吐。瀉。す。て。錦。褥。に。臥。し。轉。ひ。惱。ま。せ。玉。ふ。十六日。群。臣。等。齊。しく。宮。門。に。赴。む。聖。躬。の。安。を。問。ふ。帝。諭。を。傳。へ。て。曰。く。頭。痛。眩。暈。四。肢。軟。弱。に。して。動。履。玉。ふ。と。能。ひ。せ。各。官。衙。に。回。へ。り。事。を。辨。ぜ。よ。御。醫。を。召。す。汝。等。も。同。下。く。來。り。見。へ。よ。と。仰。々。る。臺。閣。の。諸。臣。お。の。元。輔。の。臣。方。從。哲。に。上。書。し。聖。躬。を。調。護。し。且。東。宮。を。冊。立。せ。ら。れ。よ。と。請。ふ。廿一日。刑。部。の。孫。朝。肅。同。く。徐。世。傑。等。上。書。して。方。從。哲。を。責。む。其。言。に。曰。く。内。輔。の。臣。に。常。に。御。座。に。近。侍。す。よ。く。帝。の。病。根。を。知。る。べ。し。帝。若。し。内。廷。の。煩。勞。より。これ。病。を。致。す。預。め。疎。む。べ。し。又。宮。房。を。防。ぎ。慎。し。ま。さ。る。より。み。の。病。を。致。さ。る。猶。疎。む。べ。し。輔。臣。と。して。これ。を。知。ら。ず。若。し。知。て。疎。め。せ。己。に。病。勢。大。いに。漸。む。此。宮。閣。の。淨。よ。か。ら。さ。る。に。類。す。先。帝。の。托。し。玉。ふ。の。意。に。る。む。夫。れ。九。廟。に。盤。わ。り。天。下。の。忠。臣。義。士。皆。廢。わ。り。閣。下。つ。ら。く。之。を。思。へ。吾。今。閣。下。の。爲。に。計。る。唯。帝。に。勸。め。且。暮。の。中。に。東。宮。を。冊。立。し。玉。ふ。ん。を。請。ふ。鄭。宗。周。の。醫。を。擇。む。且。そ。み。や。か。に。冊。立。を。行。な。せ。ん。事。を。請。ふ。方。從。哲。對。て。曰。く。古。人。病。を。治。す。る。藥。を。服。せ。せ。自。ら。保。養。と。る。を。中。の。策。と。す。蓋。し。慾。寡。な。く。心。清。け。れ。ば。元。氣。自。ら。固。し。これ。を。草。根。樹。皮。に。視。ら。へ。よ。何。

不止百倍のみならん。若し藥を用ひ的當せざれば。内外共々傷る。其害反て言ふべからず。科臣楊進巍然として班を  
 出て曰く。夫醫ハ三世にわらざれば。其藥を用ひざる。其任太りだ重し。其法有餘せる者ハこれを泄し。不足せる者  
 ハこれを補なすべし。今皇上ハ日々萬機の政に勞苦せし。精神を費やし玉ふ。醫法に於て清補するに宜し。崔文  
 昇何ぞ反つて尅伐の劑を以て。聖體を損傷す。外廷の流言養生の節よからせ。侍る御人の憂感なりと道ふ。崔文昇  
 既に聖躬の疾を益のみに非ざ。大いに聖明の名を損せ。時に輔臣等敢て答ふ者なし。帝ハ楊進並に各部の諸臣を召  
 す。臣庶何ごとかハと疑ふ。帝ハ楊進が肩に掛り寝殿に御し。暫らく楊進が顔ばせと親玉ひ。諭しての玉ハく。國家  
 のことはなはだ重し。卿等よく心と竭せ。李選侍に諭しての曰く。朕に侍して勤勞し。太子と撫育して親ら生るが  
 如し。封して皇貴妃となすべし。廿六日帝の疾太はだ重し。再た諸臣を召し。李選侍と速やかに封せよとの玉ハと  
 も。誰か答ふる者なし。廿九日乾清宮に於て。方從哲を召し。李選侍が封と諭せらる。李選侍ハこれと聞て喜び。帷  
 開き起出て皇太子と呼び。まうまか言ひ合め出す。皇太子ハ直に后の封と問ひせらる。に。帝の言玉ふこと能ハ  
 せ。太子驚ろき誰かある。藥を進めよと。方從哲が曰く。鴻臚寺の丞李可灼が仙藥あり。臣等輕くこれと信せざ。○  
 帝乃ち中使に命じて。李可灼を召し。脈を診し病源を説せ。治法を諭せしむ。帝ハ聖位にや叶ひ玉へけん。藥を進めけ  
 るに。湯さハ暖き玉ハるが。御心よく藥を受らせ。玉體愈々温まり。寛潤にまたらせらる。諸臣歡躍して退ぞく。午の



後李可灼が曰く。藥力まさに竭べしと。再た紅丸を進  
 む。九月朔日曉天より急に諸臣を召す。帝遂に卯の刻  
 に崩じ玉ふ。位に在すこと僅かに二十日なり。楊進ハ尙  
 書周嘉謨。李如珪と議て曰く。宗社ハ事大なり。李選侍  
 を貴妃に封し。少帝を托すべきに非ざ。急に皇太子に見  
 ゆべし。諸臣これを然りとし。楊進ハまず闕と排き。御  
 殿に入る。間の壁に延びたり。亂れ打んとせ。楊進  
 廣げ。帝正に崩じ玉ふ。嗣主幼沖し。汝ら輩が何ぞ願  
 門と阻て。臨に御屍の入るふと。答さざるを謂て。叱  
 しけれバ。開者ハ恐れ退る。諸臣同じく入る。關臣方  
 從哲ハ。諸臣と率ひ。臨に哭し畢る。楊進すなり。皇長  
 子に見へん事と請ふ。雖ども。李選侍に阻てられ。出る  
 こと得玉ハき。宮中侍ト王安ハ。かしくも。李選侍

と給むき。太子は扶き出す。諸臣は頭を叩き。萬歳と呼び。文華殿に遷し奉らんと計る。李進忠來り。李選侍の命を傳へ。太子は召し遷さんとする。三度。楊漣大に叱し。遂に文華殿にかしつき至り。群臣禮見し。即日登極を請ふ。太子これと允し玉り。故に。群臣相讓り。内亂をおる。初六日即位を定む。然るに翌二日に至り。皇太子は慈慶宮に御し。李選侍の乾清宮に殺々と居して遷り出る意なし。尙書周嘉謨。御史左光斗等上言して曰く。夫れ内廷の乾清宮ある。猶外廷の皇極殿あるが如し。たゞ皇上の天に御りこれに居り。后の天に配し共に居玉ること得たり。李選侍の嫡母も非ず。生母に非ずして。正宮に居し。亦なくも皇太子と慈慶宮に置き。凡庸を守り玉ること得ざらしむ。大禮と行かす。國家の名分轉倒せん。早く決斷し玉りせん。後必唐の則天武氏が亂し。おこなん。怒かせにし玉ることなかれ。皇太子實りと思しめされ。諭して宮を移さる。李選侍の李進忠に謀る。宮を同じせんと催し。時。宮門の前にて楊漣に遇す。楊漣即ち問て曰く。移宮のこと如何。李進忠が曰く。李選侍怒り甚ま。今母子一宮にまて。左光斗等が言つる。則天武氏が亂り。何れの處よりか襲るを推究むべきとの仰せなり。手を搦かし。眼を瞞らし答ふ。楊漣大に叱して曰く。皇太子年已に長玉。正しく天下の主たり。何ぞ一宮類に遷り避け玉らんや。且明る六日の即位なるに。今五日に及んる。李選侍の宮を遷さるること。武氏の禍ひ早く萌せり。酉の刻と限り。別宮に遷され然るべしと言棄て。慈慶宮に趨むき。これと奏す。閣臣方從哲

が曰く。即位しむらく初九日か。十二日と候て可あり。先帝の遺詔。李選侍の封の如何。楊漣が曰く。皇貴妃の冊封のいろくべからせ。四大禮の後内外群臣と議して可なり。今天下に一日も主無んべあるべからせ。且天子再び東宮に返り玉ふの理なし。今日李選侍と移宮せはん。後これと移すの日無し。暫も遅なるべからせと。言はし。厲らか罵る。聲大内に響き。皇太子諭して楊漣と返し。別に詔のりわつて李選侍を仁壽殿に移さる。翌六日即位あり。先帝に諡りなして貞皇帝と曰ひ。廟と光宗と號し。時に天下の流言みな宮中の亂を。李可灼として海樂劫刑を用ひ。聖體と亡なへりと云ふ。方從哲の衆人の口と銷さん。爲に。銀五十兩を以て李可灼を賞す。御史王安これを聞更に怒つ。其票たる目録あり。を自から改ため。李可灼が一年の俸を罰す。是より諸臣の群議蜂起し。李可灼が進めたる紅丸ころ。方從哲に懇まれ。先帝を毒殺すと。各罪を從哲に歸し。利臣惠世楊の跡を上げつりて罪を論せ。方從哲の天に謝り。地に附して官を休。舊里に回らんことを請ふ。李進忠の内臣と兼て黨を結び。寶庫を開き。盜む事跡あり。李進忠を捕へ法司に下す。其黨引き林連など。李選侍に及ばんと。楊漣左光斗等宮闈の騷亂をおそれ。盜犯の外廷の僞りにもてなし。李選侍を輔て。天年を終へしむ。翌年正月天啓と改元し玉ふ。

○卷之三

鄭芝龍 上疏 求 勸

遊師三路覆沒。臣始驅羸卒數千人。踰關至香山。而鐵嶺報失。當是時中外文武軍民咸謂。逃必凶。其惶惶之狀不能以旦夕待。而今何以轉凶爲存。地方安堵。舉朝帖席而臥也。此必非下三操練。不中部署。尙工作者所能致也。至謂下臣。擁兵數十萬。不能中大入。大創。小入。小創。斬將擒王。而殃民。盛地爲敵。所笑。誠有如下所嘆者。上於今日之兵之將。且勿易言也。令銜僅而張師。殞命。馬上催而三路喪師。臣于今日何敢輕率。如欲三大入。大創。小入。小創。且將各選精兵再調。數十萬來成一川土之勢。然後進取。亦未爲晚。而非下今日病臣罪臣。所能及也。惟有三丞遣才。望勿誤。壞。封疆。乃爲急著。帝乃ち御覽し。鄭芝龍を奮の藉也。回し且張修徳馮三元を遊に往しめ。芝龍が功罪を勘ためしめん。と欲す。楊漣重て奏して曰く。軍旅の事。言官馮張が知べきに非ず。武官をして勘がへ查しめむる時の勘し得て眞に還るべし。帝これを善とし。乃ち兵科朱童蒙を遊に往しめ。巡撫袁應泰を經畧とし。芝龍に代らしむ芝龍の帝都に回し遊に一年在し間。軍民を輯め城壁を修葺し。兵馬を調練し。錢糧を催し。兵具を造りし功を遊一にこれを記し。再び疏を上まつりて曰く。廟堂の議論の實に軍中の情を言せ。第塘報路中の風を聞て。敵の緩急を圖るこれを矮人の場を觀るに譬ふ何の眞見かこれ有ん。今よりの經畧よくこれを省と任せざる時の。其將恐らくの手足を措に地なし。臣惟封疆の爲に孤忠を竭し慮りか。路官の勘查を待とぞ奏しなる。斯て二月を経て兵科朱童蒙速より歸京し。朝廷に奏して曰く。鄭芝龍の邊才。夷を防。漢の登去病に譲るべからず。任に趨き繼に十二月遊東太富り盛をたる城壁の新に築が如くに修し。隙亡ひ齒給らなる軍民の骨健かに手快精兵と化す。開原瀋陽の二つの空城今既に嚴かある好箇の重鎮となる向後の大將のれに因り進つて。戰ひ。退つて。守る豈に芝龍の功に非ぞや。臣始て遊の地に入るに及で。官民

御史顯楷奏して曰。鄭經畧已に關と出て。遂に赴きしより一年と踰ゆ。戰守何々兩つなから策を定むることなからんや。官軍數十萬いまだ一本の箭を加ふるを聞ぞ。先に餉なし兵無しとも論すべけれ。今既に數十萬の兵。雲の如く聚まり。百餘萬の金川の如くに輸す何を以てか芝龍自ら戒嚴して師を出すことの晩なるや。御史馮三元張修徳魏應科等疏を合し。鄭芝龍に智謀なきを論す天啓帝これに感りせ玉ふ。楊漣奏して曰く。鄭經畧を議する者も其功を抹し難く鄭經畧と憐む者も其咎を掩ひ難し。其功を論せし遊を支へて一年俸に安きを待其咎を論せし襄兵ある以難く萬全の策なきを恨む。臣今芝龍に代り二つの策を定むべし。一に廣く諸の策を收め後の功を圖り。君父に報せこれ一策なり。又朝廷に緘め速り賢を求め速やかに交代するこれ又一つの策也。若緩々とゆるやかに泛々とのひやりに今日の議し。明日勘め受せ。遊陽の既に凶へし斯て。北京に奏議早く遊陽に傳ふ。鄭經畧乃ち疏を上まつり。馮三元張修徳に詔りし。遊は事體を勘し查め玉へと請ふ。疏の密に曰



士庶自から野に哭し市に泣いて芝龍を思ふ。城壁の工作を爲の事を審かにすれば。芝龍自らこれを督く。磚を空室より借り木を園より伐る。墳墓の石を移し日を限つて了る民物を争ひ奪に非ざ。先に朝廷の官官して稱す。塘報なりを聞て實とし以聞て一年は邊役に萬年の憂を固ふす芝龍か功に歸す況や邊民同く樂しむ。農の耕種を事とす。商の筭法を繼ぐ再たび邊に起用の玉へと奏す。帝乃ち鄭芝龍を召し詔して曰力て危城を守る其策勳深すべからざる。今既に去んふとを求む。再たび請して起し用ふべし。猶邊を守る策を獻せよとの玉へ。芝龍の頭を叩き再拜し恩を謝して退らけり。

客執行姦亂政

天啓帝の乳媪に客氏と云る者あり。帝は慈愛深く。登極の後。奉聖夫人に奉せられ。常に隆徳殿の西南なる咸安宮に居て。朝夕の儀御を進めける。凡そ大膳房に於て御膳を造る官人の王體乾。魏忠賢。李永貞。及び客氏が下の内官より進め奉る。其下の官の青衣紅衣を著しこれを造り捧ぐ。水陸の魚肉四時の珍菓普く華夷を探り盡し進む酒の秋露。荷花菴桂花。蘭菊。花。蝶。芙蓉。波。浪。子。花。椒。芳。醉。金。盤。露。等の勅號五十餘種。是是前朝の魏士望の家傳を以て魏忠賢ふれを造る。總ての御膳客氏が試み進むれと自ら上意に合ふ。客氏が生辰。日。十一月十九日帝必は臨幸有て飲宴し玉ひ。多の服を願つ。百官の壽儀黃金珠玉車に載來る皇后貴妃も及ぶべからざ。客氏齡四十餘に至て淫欲甚しく。密

に。大監王安り下の官魏朝と通せ。魏忠賢昔の名の進忠。魏忠賢の時より目よ二丁の字を贈されども。其性黠慧。膽大にして細事を省り。武藝を嗜み。馬を善く馳せ左右の手にて弓を射る。王安もと剛直にして武を好み。忠賢の魏朝と友とし善りし故に王安これを薦む。魏朝の客氏にこれを憑み忠賢遂に大膳房の官となる。前朝の時に。魏進忠と自ら呼て。李進忠と紛らし。外廷の人を給む。當朝に及て客氏が權さかんなるに。魏朝の常に王安に隨がひ。間し客氏淫亂のあまり。膳房にて亦魏忠賢に親しみ。遂に密通と。或夜乾清宮に於て。兩人相争て客氏を抱く。其聲かまびそしく。御前に達せ。客氏久しく魏朝を罵れ弱く且暇なきを厭ふ。魏忠賢の慈慧無智にして。只武を好み一字を知らざる故。反つて并實にして制し鼻きを喜び。を爲に魏朝が醉狂せると讒し王安か下官を離し。宮人の口を閉し。忠賢の詔を矯り魏朝を風陽に遣りし。毒殺と。是より忠賢専ら客氏の愛を受け思避ること無し。天啓帝武藝を好み馬を馳るを看玉ふ。客氏の魏忠賢を薦め。武藝を以て笑を獻せ。帝乃ち内輔官の員に入。日々御宴に陪す。客氏が吹嘘の光に憑て忠賢が威勢自ら剛く。遂に國柄を執るよ及ぶ。又帝自ら斧鑿墨を以て工作し玉ふに巧なる魯般も及ぶと能い。内臣の除文輔萬九思なんと召れ。朝夕に袞龍の衣を傳瓦の上へ脱き斧を打鑿を立て。柯を伐木を刻み。自ら宮殿を營み器具を造らせらる。營造心にかなへば飯食を忘れさせ玉ふ久しからずして棄て。又新をに遣り倦玉ふこと無し。司禮監王體乾もこれを疎むること能い。却つて阿ねり褒む。魏忠賢の面映を以て寵を

貪り朝廷に跋扈かる。客氏の宮中に在て后妃を誦ぢり。内外の虐政こゝに始る。名卿鉅公これを惡み諫むれども帝納玉のねに楊述李如珪が輩歸を乞んと圖る。客氏の毎日戚安宮を出て浴殿に入り御前に至り夜深て廻る。宮人の屏風の陰よして忠賢を密ひ會て人知り難し。戚安宮に若干の美女を置き魏闢 忠賢に阿ねり從ふ。王朝輔劉應坤李永貞石元雅除文輔等つねに子姪に如く往來し。醉に乘し。美女を犯すに及ぶと云へども。客氏ふれを尤めず。忠賢もこれを制せざ。是尙の計を云事を知せ。客氏常に戚安宮に居る形勢の聖后雅后とも謂つべし。其佞姦を行ふに及てり中宮を危くし。且裕妃と申す宮女あり。帝の寵愛他に異なりしゆへ遂に懷妊の身となりけるを。客氏深く是を惡み種々と讒をかまへ裕妃をして宮牆にをしこめ。飲食を絶つ。成妃これを憐れみ磚瓦の縫の内に食を藏し命を保たしむ。然るに數日を経て咽隔死して屋の雷を飲飯死す。成妃もまた裕妃の如く封せられ死す。李妃の粧るを惡みて。了髮を容れず。老婆に按摩せ聖胎を墮す。其外宮人。客氏か爲に辱しめられ。或の事に坐し害せらる人枚舉せざるに及ぶ。客氏常に奇麗なる盛服にすつくしく靚粧て。乾清宮より小輪に乗り。嘉德和順德石の諸門を過ぎ月經門を経て轉より下らざ。直に西の下馬門に至る。弓箭を帶たる武官同く紅蟒衣を著たる侍官これを迎へ前後を擁み行く。數百員の文官やで皆跪す。つぎて傍より候す。たまへ客氏が目撃し領ひ動け。こゝを以て榮とし喜び合ひ。また毎年兩三度の忠賢が興を催し出て遊ぶとあり。其時西の下馬門より八人の駕輿丁大輪をもたげ

行く。前後の提香爐に沈水香を燒煙り霧の如し。侍從の盛なる聖駕の遊び幸なるに齊しと云り

貝勒王 奪三藩 關

經畧袁應泰の。遂に趨むきてよも。鄭芝龍が軍令の嚴さを改めて。民を安んじなつけんとして。後の患へも顧みず。法度を寬くしたりけり。こゝを以て士卒相争ひ。遊人の粟を刈取。或は民を擧げを擧げせり。遊民これを憂へ。冤を合む者多かりき。此に夷落より三千の胡降旗を建來るあり。袁經畧事の由を審かに尋れ。胡答へて曰ける。近年魏祖の太子幼沖なく叔父攝政王の。中國を征伐す。年々の軍用に窮られ苦む故。村落盡た困窮し。民の隨の烟もたへだへになりたり。漸經畧至り玉ひ。民を惠み玉ふよし承り候ふ故。降旗を建伴となる伏して願く。將軍哀憐を垂玉ひ。死を盡きて忠を致さんと願しやかに遠にける。袁經畧これを聞き。大に喜ひ。其勢を瀋陽に送り。加世賢に相從へ。城を守らせ置たり。兵科蕭基の。北京にて此由を聞より。袁經畧が愚にて根子の野心を知らざるを。如何いせんと打聚まり會議評定す。ちくなり。斯て貝勒王の降夷が内通を。袁應泰が軍令嚴密ならせ。士卒離れ叛き瀋陽の兵。五六萬に。遇と傳へ聞。雀躍に堪せ大に喜ひ。虎賁烏金王を大將軍とし。左監軍總勦王。右監軍安大人を兩先鋒と定め。金虎山阿克商達業加勒從經を裨將と定め。其勢擧て十五萬の兵清河の城を進發し。瀋陽の十里北なる西河の村に押寄たり。瀋陽の城に。僅に官兵五萬降夷三千に盈され。加世賢の賊兵はるるひ來るの由

を傳へ聞。大に驚ひ恐れつ。裨將黃龍瑞をして。北門を固めさせ。自ら北固山に勢を分ち。晝夜を輪せ。狼煙を舉  
 其烟り驟々として。暗く天風にも亂れちらす。直に銀漢を渡りけり。遼陽の袁應泰は。遂にこれを望み見て。すいや  
 賊兵瀋陽を襲ひ来るぞと。都兵馬總總督牛繼曜を先鋒とし。若干の裨將を前後左右に立並へ。都合共勢十餘萬  
 自らこれを控へて。瀋陽城を援けんと。もにもんて急ぎける。さて又清の軍兵の西河原に陣を排り。左監軍の總  
 哨王百花の鐘。理豹の甲を披掛て。大に馬一り真先かけて進んたり。明軍に先鋒の吳文傑。鐵龍。鐘に紅錦の甲を  
 著て。負じとこれも進みけり。監軍の周敦吉。秦邦屏も左右に響を駢て。驛出と。清の陣に。裨將金虎山。阿克商。達素  
 伽勒。從經。一度馬を躍らせて。互に長鎗を合せつ。步兵を劇し相戦ふ。監軍の周敦吉。裨將は金虎山と渡り合  
 ひ。まへし戦ふと。やへつる。馬より下に突落さる。秦邦屏。こきを見て。わらもの。し。の。驍賊が。驍動かな。いで同  
 軍の仇報せんと。蛇矛を振り立。馬を馳せ。金虎山を討せじと。清の軍兵四五十騎かけ。圍りて戦へども。秦邦屏が矛  
 に突立られ。四方へばつと逃にけり。金虎山の赤兎馬に鞭をめて。長鎗を右の脇にかいこみ。電光の飛ぐ如く。秦邦屏  
 が甲の縫まを聲をかけて衝突す。秦邦屏の長鎗をたぐり。奇んとしけれども。金虎山が臂力にて左の脇を衝たる故。自  
 ら堪かね馬より落。大將軍烏金王。遂にこれを打望み。戦の醜なるぞと。のれり。れと下知すれば。十五萬の清  
 兵一度もつと打擁み。縱横に斬進む。明の大將加世賢。周泰の二將を。一手に討せ。軍勢の銳氣を挫かれ。今何

を。か。期。と。べき。と。銀。鳳。の。盜。の。標。を。再。た。び。結。ぶ。べ。ら。す。と。自。ら。よ。く。し。め。頭。を。擧。げ。ば。袁。經。畧。が。十。萬。の。援。兵。雲。霧。の。如  
 く。來。り。たり。北。固。山。を。打。越。て。軍。兵。大。第。に。近。付。ば。加。世。賢。の。力。を。得。慶。下。に。下。知。し。て。曰。く。援。兵。正。に。來。る。ぞ。と。勇。み。叫  
 ん。だ。せ。め。戦。ふ。清。軍。の。北。固。山。の。鑼。鼓。の。音。響。の。崩。る。べ。かり。な。れ。ば。大。に。機。を。不。喪。ひ。ける。時。に。右。監。軍。の。安。大。人。か。し。こ  
 く。も。下。知。し。て。曰。く。大。軍。師。員。勒。王。預。し。め。こ。れ。を。知。て。勝。こ。と。を。千。里。の。外。に。決。せ。ら。る。道。一。戦。に。瀋。陽。を。奪。い。ん。こ。と。掌  
 を。さ。さ。ぞ。如。く。な。り。些。も。お。そ。る。こと。勿。れ。唯。日。の。暮。を。期。と。爲。し。敵。の。引。を。要。と。せ。よ。袁。經。畧。が。飢。兵。何。の。銳。氣。か。こ。れ。あ  
 ら。ん。と。さ。て。明。軍。の。援。兵。の。來。る。を。俟。ひ。清。兵。の。敵。の。救。ひ。を。疑。ひ。て。互。に。兵。糧。を。遣。ひ。馬。に。飲。り。か。所。に。遼。陽。の。援。兵。十。萬。騎。  
 天地を轟かし。をめき叫んで向ひけり。清の兩先陣安大人。應。勒。王。も。十五萬の兵を。備へ。相戦ひ。明兵を引入んが爲に  
 一歩進むべし。三歩退きざらば。引色に。みせければ。明の兩先陣馬達牛繼曜。これを見。敵の三日の戦ひに。太だ疲れ  
 たるぞ。一戦にあまとな。もらそと。さしめきける。瀋陽の裨將黃龍瑞。前導させ。敵の陣處を奪ひ取んと進みけ  
 り。安大人の頭を。回らし。日己に。西に沈まざるぞ。今一支せ。瀋陽の吾掌に。握れりと。進む敵を。追擁ひ。衝て  
 進め。反て退ず。袁經畧の賊將の進退を。怪し。み。慶下。に。下知して。曰。賊。の。別。に。討。つ。こと。ある。ぞ。遠。く。入。こ。と。勿。れ。と。制  
 せ。れ。ども。遼。陽。の。新。兵。敢。て。耳。に。も。聞。入。ら。ず。機。に。乘。じ。て。討。せ。ん。と。思。つ。る。た。二。十。里。を。か。り。追。て。ゆ。く。た。か。か。に。後。陣  
 騒動しける故。何如ある事。ぞ。と。馬を。回せば。瀋陽の裨將黃龍瑞。心。か。わ。り。し。降。參。夷。の。三。千。と。心。を。合。せ。城。に。火。を。放。ち。

味方を切り傷ると聲々に呼りける。既に黒烟天を掠む。官軍これが爲に散亂し。清の先備へ安大人の白馬に打乗り。八十斤の劔を打ふり。敵の中へ切て入る。明の馬牛の兩將わへなく安大人に討れける。士卒の首級の算へむたし。加世賢の萬死を切ぬけ。實龍瑞と。さしちがへんと縦横むざんに原ける。敵に取返られて討れにけり。瀋陽の張詮の城を守り居たりしが。實龍瑞がへりて。北門より火起り。餘焰延て本城を燒き。吾軍の敗北するを。樓より望み見て妻子を殺し。其身の井の中に身を投て死にたる。袁應泰の兩將打死にし。十萬の官兵半の討れ。二分の離れ叛く。殘兵三萬餘と引つれ。遼陽として回りける。清の大將烏金王の瀋陽を二戰に奪ふこと。偏に實龍瑞の一味に懇しして攝政王より紅蟒衣を賜りける。實龍瑞の清の恩寵に傲り。常に蟒衣を着て瀋陽を徘徊し人ふれを惡む。黃衣と呼て是を嘲りぬ。北京の妻女の此由を傳へ聞。朝廷に罪せられんことを恐れ。密に尋ね來りければ。黃衣。清王の恩をもの語りして曰く。吾今清に歸伏せり先に大軍師貝勒王千金を贈り。内通れ事を托し。且吾女を太子の后妃とせんことを誓ふ。清朝鼎を定るの後の。吾正に外戚となる豈悦ばしからせやと。いひしかば。妻は林氏怒て曰く。御身の利の爲に國を賣る天下の寇賊なり。妾の笑符の腹き身なりと云へども。何ぞ賊臣婦となるべけんや。吾女の中華の水を呑み。中華の粟を食ひ今既に符とるに及ばんと。何ぞ利害の爲に胡虜と稱するに忍びんと。言了女を刺殺し。自ら縊れて死しにけり。黃衣の後に遼民これを捕へ。遼陽の市に懸けにすしたりける。

魏闢線索亂國

魏忠賢原匹夫より出て。一の文字をばへ知らざれども。其性黠慧して。よく事を記し。機に隨て變に應じて。詔を矯る。太監王安。前朝より國柄なるを。客氏魏忠賢これを惡み讒して。南海の淨軍とあし路次にて殺し失ひけり。爾しより魏忠賢。心れまへにす行ひける。客氏の天啓帝の恩寵むつ。日夜に宮房の事を司とり。百官の事。自から忠賢が權に依すと云ふことなし。魏闢一味の者に。史實裴升張文元皆魏臣にして文を善と。故に魏闢の乘筆に當つ。朋比に。王體乾を首として。李永貞。石元雅。除文輔など。常に相議し詔を矯りり役所役所へ出しける。李朝欽。裴有聲二人の。百官の表疏の姓名を掌り記す。魏廣微。崔呈秀の内通を司とる。凡百官の封事より上疏に至てことごとく。魏廣微が符を藏めこれを論じ。外題を内閣家報と名つけ釘を打。花押を加へこれを封し心腹の人として。忠賢が官舎に送る。李朝欽。裴有聲これを收め掌とる。此廣微及び崔呈秀が百官の表疏を獲取し詔を矯るの草案也。石元雅の照將錄同志錄天監錄と云ふ三部の書を編む。凡兵科の官の姓名を記し。魏闢に従ふ者に。朱圓を加へ。魏闢に忤ふ者に。墨圈を加ふ。これと點將錄と云ふ。又内外の諸臣魏闢に従ふを録し。親しきに朱圓し。疎きに墨圈と。これを同志錄と云ふ。又群臣の魏闢に讒すべきを録し。急に討すべきを朱圓し。緩く討すべきを墨圈と。これを天監錄と云ふ。皆李朝欽の原本を收め。朝とるごとに李永貞。石元雅。除文輔。王體乾。まづ忠賢が直房に往き。魏



廣徽が内閣家報を開き。前日の表疎を察し。三部の編  
 に校へ照し。忠賢に譲り。魏闢に忤へ。詔を矯り。或  
 官を剝奪を削り。刑罰追贖ぐるを云ふ。其法一ならず。  
 是より魏忠賢が。權日に増し月に盛んにして朝廷の政  
 のひとへに魏闢の綵索より出づ。群臣。李永貞。石元雅。  
 の諸闖を賄ひすれ。彼其人を魏南樂。廣へ來往せしめ。  
 又ハ崔蒨州。呈と親まをなし。後忠賢又達し。大官に進  
 め昇す。忠賢が姦佞諸員を擢用以後。勅な。矯り。事  
 に坐し追贖す。故に其黨の輩らまで常に懼れ阿り諛ふ。  
 魏闖天啓の始り。外廷の妬みをたろれ遠く出ざりし。ケ  
 四年の後。外廷に従ふ者多くなへたれ。客氏王體  
 乾を伴ひ。己が領分。知の涿州。又往。天壽山。於て。  
 春秋祖先の祭をなす。期に先たち十餘日より道路を清

め新たに廠を立て。驛を停む。村々の民戸。花を挿さ。み柳を飜る。男女の老幼。香を焚き。魔つきて。これを迎へ。拜と。冠  
 蓋のひらめく。電の如く。車馬の轟く。雷の如し。紅塵天を障ふ。琉璃河名。のより見望まんとする人。或ハ狂奔し。或ハ  
 挨拶ひ踏死され。壓し倒さる。北京若許の大都なりと云ども。此忠賢が春秋の祭に。人馬を雇ひ盡して。戸々に烟り  
 無し。忠賢ハ八人轎に乗る。數百の宦者。各四人轎に乗る。左右前後を押圍む。錦鞍鮮衣。上下を照し耀く。道路の庶  
 民。銀錢を分ち與ふ。畿南の一帶。路の泥。かかくして。行難き。忠賢資と捐て。隄を築き。橋をかけ。涿州に留り。若急事  
 の用われ。除文輔。李永貞等。輪りて。これを辨じ。早馬捷足の人を馳せ。百里の遠きを一日。再び往還せしむ。忠賢  
 都下に在て。遊行するに。夏。車に水を載せ。炎氣の塵と避け。寒天に。獸灰を積。こと山の如く。魏闖の豪奢。黃卓の  
 媚。鳩石崇が金谷。よも比すべし。如此の暴虐。國政に災ひ。それども。天啓帝ハ。知しめ。さ。朝夕酒色に荒み。忠臣を喪ひ  
 玉ふところ。淺ましけれ

○卷之四

婉童爭奇會

天啓帝色に荒さ。み玉ひしか。北京官民の習俗。淫蕩の風に變じ。都下に街あり。花柳街と曰。遊女の巷あり。衛術巷  
 と曰。藏兒の巷あり。男院の門に。長春苑と額し。女院の門に。不夜宮と額す。是東坡が詩に。風花。直入長春苑。

燈燭交輝不夜宮と云ふ意を取れり。二所の變童美女。何れも一時の秀麗男女。色を争うひ奇を驚ふ。長春苑の少年の。皆少の字を以て號す。不夜宮の妙妓の。皆賽の字を以て號す。天啓帝好色の餘り。長春苑より。少彌と云る變童と召れ。不夜宮より。賽施と云る妙妓を召れ。互に恩寵に誇り。幸を妬む。賽施奏して曰く。君知しめさせや。男風の亡國の兆也。矧や少彌が名に於る。古の彌子瑕より。少しと云ふに取る。衛の靈公ひたすら。彌子瑕を愛し。桃を分ち喫ひ。袖を斷眠る。遂に衛の國を喪なへり。帝つら。これを思ひ玉へ。少彌又奏して曰く。上聞し召せ。女色の荒政の基也。且賽施が號する。昔しの西施を賽と云ふ義を取れり。呉の夫差専ら西施に溺れ。姑蘇臺に沈醉し。遂に吳國を亡せり。君よくこれを思ひ玉へ。天啓帝の二人が諫奏を納れ玉ひ。大に歡ひ。彼等が辨才眞個の無河也。朕思ふに。翰林官椒房宮に如此の才子あるを聞せ。乃ち内官王體乾に命じて。長春苑より諸變童を召し。不夜宮より。諸妙妓を召れ。帝自ら營々造り玉へる。比翼宮に出御せしませ。佞倖の内臣恩寵の後妃左右を擁み。頸を伸へ耳を傾む。容氏奉聖夫人これを領し。婉童の兩隊を分ち。各々粉を傅紅を施し。色を競ひ。奇を争う。實に亡國の基也。不夜宮の女色の。群に超へ。花を弄し。柳を拈す。長春苑の男姿の。俗に絶れ。風に吟し。月に嘯む。兩隊の風流。誰かよく優劣を分たん。妙妓賽彌出て。少都に問て曰く。爾が名。少都。昔日鄭の莊公の弄臣。子都が美に比するや。然ら。子都の。宋公が爲に偃殺せらる。爾往日の頭。何んか存る。長春苑の變

童少都出て。對て曰く。賽彌備が名。當年漢の王允が婢女に肖たるとや。然ら。賽彌の。蜀の關羽が被に斬る。備昔日の首の奚もか存す。君婉童の對論を聞し召れ。賽す。雀羅し玉へ。滿座の官員。一齊に喝采す。時に長春苑より。少都出て。賽後問て曰く。爾が名。周代の褒姒を賽しとや。幽王これを寵し。烽火を舉て。備が一たび笑ひんことを。累も後犬戎の師至るに及んで。烽火と舉れども。救兵なし。遂に汝を殺す。賽後乃ち對て曰く。備が名。晋朝の王衍も方らべんとや。景帝これを用ひ。位を恃み寵を固し。營三窟を作れとも。後石勒が爲に殺さる。容氏奉聖夫人。これを叱して曰く。婉童が問話皆これ。風刺の詞を聞が如し。太だ殺風浪なり。惟婉童奇を争ふの論をなし。一場の笑と歡せよ。時に妙妓出て叫んで曰く。我の一女。一方是陰陽の交柄。婉童乃ち對て曰く。我の一女。一冠別乃風月の機關。天啓帝の曰く。方纔の婉童が言語。江湖禪家の葛藤を打するが如く。朕もまた未徹在。別に風流の語をなせ。こに於て。諸童諸女牙を磨き。齒を利き。各痛く罵り。一場の笑に換奉まつらんと圖る。一女進出て。變童を罵て曰く。汝は唇尖間の物。一團茅草亂蓬々。一童速りに對語して曰く。汝は裙帶下の貨。四季氷泉流滴々。天啓帝。自今の對を聞し召し。自ら笑ひ絶倒させ玉ふ。一童又罵て曰く。妙妓の腰間の物。松樹の下に。兩片の寺門を開き。和尙の出入するが如し。一女答て曰く。變童の背後の貨。草岸の間に。一箇の洞穴を穿ち。泥鰌の往來するに似たり。天啓帝の婉童が滑稽を大に噴食し玉ひ。後宮中に兩院を設け。數百人の婉童を集め。百の戲あれ歌舞の遊び。

風花。雪月。琴棋。書畫。等の題を賜ひ。彼等をして。才智の奇を争うらしむ。是實に。人中の妖物。亡國の光し也。

鄭芝龍再守滬

天啓五年の春。遼の瀋陽城。降夷の内應により。敵に奪われ。袁經畧七萬は官兵を喪ふた由て朝廷の軍議きやく也。帝詔して鄭芝龍を再たび遼の經畧となし玉ふ。鄭芝龍謹で奏して曰く。夫兵の國の病也。凡る兵と治せると病を治せるが如し。外六淫は邪も。原るに内七情の虛に乗ず。邪の寇伐せべく。虛の潤補すべし。今遼。吾封疆を犯す。原ぬるに是邊戎の虛に乗せ。將としてこれを。防護せずんばあるべからず。然るに楊錦。袁應泰。將法を知らず。寇伐を専らにし。防護を疎かにす。范文正公の所謂。達則爲三良將。不達則爲三良醫。其治むに二つ有んや。臣退て圖るに。遼と守るの要は。廣軍。登萊。天津の固めを先著とせ。近ごろ聞く。毛文龍の。順撫。王化貞が命を受。河東の賊を退ぞけ回る。賊再たび數萬の兵を率て。鎮江と陷む。文龍も衆寡敵し難く。朝鮮に走る。これ皆三方鎮固の寬さよれりと。其理を正し。奏しければ。天啓帝これを然りとし玉ひ。重て尙方の劍を賜ひ。十餘萬の兵を領せしむ。斯て鄭芝龍。遼陽鎮に至ぬれば。繼に去て三歲ならざるが間に。瀋陽の糧兵の巢穴となり。百姓胡服に變じ。頭べを剃し形勢。嗚呼太古より。聖賢互に出玉ひて。禮義を成せる邦なるを。俄かに胡土にや變じける。坐に涙を墮わへ。撫臣王化貞が曰く。今鎮江の賊。吾文龍を。何ぞ坐して敵と待んや。必だ往て救ふべし。經略

鄭芝龍が曰く。臣さきにこれを廷議す。廣軍。登萊。三津。布置の兵。今正に名のみ有て實なし。明年を俟ち。各鎮を備へ。兵馬の全きを得て。三方より并び進み。ゆれを伐たむ。一鼓にして得べし。遼の恢復。此時に在りと對ふ。王化貞が曰く。撫臣の進を主さざるを職とせ。何ぞ坐して來るを俟ん。矧んや今正に河を過なむ。吾兵の氣自ら倍し。兵少なしと雖ども。功を成べし。若また猶豫して年を過さむ。大敵の備へしよ。整をり。吾軍一毫も利なかるべし。且詔を奉じ。尙方の官軍等。空しく時日を過すべからずと云ひ。鄭芝龍も。王化貞が性の急なるを。制し難くぞ思ひなやむ。去る程に。鄭經畧の。林某に。回り帷中に坐し。張鳴鶴。劉綎。吳煥。沈霖。同坐く。商議して曰く。敵の軍師。貝勒王の。處の。猱狸にして。智謀と兼。預かじめ孫吳が術と曉り。領するに數百萬の兵あり。然るに今。官軍は寡きを以て。賊の衆に敵せんとい。奇謀を出すより。佗なし。南登の火攻と用ふべしと有れば。各將これと然として。乃ち地雷と云る火器を。五六千をのり製し。士卒をよく訓練し。自ら十五萬の清兵を率ひ。河を渡り鎮江を距て。五十里山に麓に築き掛。仙杉谷の陽に。芒草錯亂たる坂の間だに。鋼輪に地雷を掛。夜毎に地を穿ち。これを埋むと。六七里連ね伏たり。既に十月の半。嶺雲よもに興り。落葉錦と剪る。鄭經畧は。龍蛇の蓋を載き。朱地錦の百花袍を着て。連環の鎧を重ね。尙方の劍を佩ひ。白兔馬に打騎て。張鳴鶴を右先鋒とし。劉綎を左先鋒とし。吳煥。沈霖を兩監軍と定められ。都合其勢十五萬。直ちに鎮江の賊營を。七重八重に取圍み。ときを作り鉄炮を。あられの如に打かくる。城中

よりも射手を翹へ。毒箭を雨のごとく。敵々に射させける。かくて右先鋒張鳴鶴の鉄網の蓋に。生鉄の鏝ときて驛驢に跨ぐ。天蓬欒をさしかざし高四平の勢をなし。八面を殺倒す。清の先鋒吾金王は。虎皮の鎧に。豹の鎧を掛。長柄斧をかりあげ。殆んど敵竹の勢をなし。張鳴鶴と相戦か。吾金王伏虎の勢となせり。張鳴鶴の降龍の術をなし。相挑む事二十餘合。勝負いまだ分たざるに。賊勢數萬俄かに遮る。張鳴鶴支へ難く。馬に鞭し送とる。清兵大に機を得。わめき叫んで殺倒す。此時に官軍の驍將步陣。多く亂れ討れぬ。清は先鋒吾金王の。鎗放を鳴し。趕來る。官兵は銳氣を奪はれたるや。伴はり逃るとい見ゆ。ざりけり。吾金王も。埋伏の有んことを懼れ。敢て林藪の中へ入ると勿れと制す。然れども機に乗る賊兵思ひ。仙杉谷の中路に進む。吾金王も。必安んせせして。麾下の驍將を下知し。逃むとを得ず。かゝるるところに。三里ばかり隔たる夾壩より。五方形の旗を夕日に輝やかし。數萬の將卒。大將軍を擁し來る。吾金王の頭を回らし。急に師を回さんととる。忽ち一聲の飛天噴筒を放り。火の光雨を流ぐが如く。火珠飛て木は葉にざりり燃ゆ。清兵をれを救んと欲する處に。忽然として大地分裂し。百萬の雷轟き。落るに齊しく。山鳴り谷應か。火藥強く盛んなれば。人を飛し馬を擡うつ。吾金王の手足裂て。十丈の松の枝に掛り死す。二十五萬は清兵。一時は火攻に。一人も遺るもの無く。十丈の深淵屍の丘とぞ成にける。鄭經響り。鎮江に入り。降夷と斬て威を示す。張鳴鶴留守とし。軍と班め。遼陽鎮に回る。瀋陽の城に。撫政王早く。大軍師貝勒王を召し。先鋒

吾金王。敵の計に中り。二十五萬の師と裏ひ。先鋒の戦死せしと深く惜み玉ふ。貝勒王の。諸軍將に向ひ説て曰く。夫兵の機事なり。故に孫子も。詭道とい説たり。智將の舉動みな機。非ずと云事なし。洵さば機に非じ。奇正伏の三兵も皆機中より分る。闘の氣なり。旗の以て目と教へ。金鼓の以て耳と教へ。士卒と指揮と。天地風雲。龍虎。鳥。蛇の八陣も。かりと詭り説くるの名のみ。其要の。將よく士の意と知り。士よく將の心と知るに過ぎ。此千古の兵法なり。吾金王の。一時の驍將にして兵を鍛錬せず。勝に乘じ深く敵の巢窟に入る。鄭經響りよく士の意と知る。鎮江の先鋒が軟弱なるも却つて敵と引れ智にて。遂に火攻の利と得たり。臣竊かに謂ふ中國の諸將。林藪溪谷の中。兵と伏せると知り。軍中に兵と伏せると知らず。吾大王一たび國と建玉しより。臣が不材なると以て軍師となす。臣豈に寸丹の誠と盡ざらんや。故に撫順清河と鎮しより。瀋陽も及で。兩國の百姓に婚と結ぶ。其簿と考かふるに。兵口二十餘萬。五年にして。見孫と得る事五萬餘。これ我軍中の伏兵。戰に臨んで。敵中に交へ。内應ふれたる事あり。明の朝廷暗愚。色に耽り政に荒む。賊臣忠賢威と振るひ。名卿多かり。職と罷。諸州の盜賊縣と劫やかし。民と屠り。官より兵と募る。故に國人朝發になやむ。今遼陽の兵三十萬に過す。廣寧の劉保成の兵も。僅一萬あり。過ぐべからず。彼利と貪り。城民課役に窘めらる。大王若し清河の賈民に金と與へ。廣寧の民に。利害と説かば。内應の心を生ずべし。撫政王こきと然りとし。賈民として遊説せしむ。劉保成清は降將李永芳と通じ。内應せん



と許る。城民と清河の賈人。交易すると聞これ疑がひ。先を奪りれて叶ふべからずと思ひ。精神と勢しける。鄭  
經畧が賈者。早くもこれを悟り。劉保と遼陽に捕へ。家を籍する事なり。及んで。李永芳に通ぜし事露れしか  
ば。王化貞大に驚き。劉保を斬罪し。張鳴鶴を鎮江より召し。廣寧の城を守らしむ

王順撫 敗三績 廣寧一

貝勒王の廣寧の劉保斬罪に處せらるの由百姓より密に内應せしを聞諸將と會議し廣寧に新兵と添ざるの中。一日も  
先づち攻落さん。運滞せ。鄭經畧必ず。京兵と請ふべし。廣寧の攻忽せにぞ。からずとて。降將李永芳を右先鋒  
とし。安大人と左先鋒と定め。十五萬の兵を與へ。貝勒王自ら五萬の兵を領し。廣寧を圍む。張鳴鶴。早くもこ  
れを遼陽に告て。急に援の兵を徵む。鄭經畧齒を齧み。王順撫何ぞ。彼を知るの智無や。吾嘗て三所の固めを論す  
るに及て。廣寧を以て三所の先著とぞ。今賊來り襲ふ。自ら圍るに賊。鎮江の敗と憤る。必は貝勒王自ら大軍  
と率めべし。廣寧の兵。僅に一萬に過す。これ成りの名のみ有て備への實無し。張鳴鶴如何ぞこれと防ごん。王  
順撫。頼顔又手し。驟かに十餘萬の師と出し。間道より向ひ援ふ。鄭經畧。十萬騎と率ひ。右屯口より向ふ。斯て  
遼陽の援兵。廣寧に河邊に至れば。賊兵。雲霧の如く城郭の四面と圍む。城民内應すれば。清將李永芳大に喜び。  
左先鋒の安大人に更に五萬の兵を分ち遣す。安大人二十萬の兵を領し。王化貞が支へたる河邊に向ふ。李永芳。五

萬の精兵を簇擁し。砲を鳴し。箭を放つ。城内に。羅一貫。さしもの。賊將なれば。自ら偃月刀を揮ひ。一萬の將卒を  
一齊にし。五萬の敵を防ぐ。聞の聲天に響ひ。矢さけびの音山よ響く。斯るところ。李永芳。相降旗。降参せよと告  
建れば。内應の城民。忽ち火を放ち。炎々爆々として。烈煙空に亘る。されども。張鳴鶴。鉄龍の盔に。虎豹の戰袍  
を翻へし。青眼を睨らし。西門を支ふ。李永芳は。火炎の燃るに。乘ま。西門に雲梯をさしか。乗越んとす。城將西門の急  
を見て。羅一貫は。白銀の花登に。赤綾の戰袍を。披掛栗色の馬に。纏し。張鳴鶴と。同く防ぎける。李永芳が。歩兵早く。斧  
を以て。屏を倒し。總軍亂れ入。羅一貫。大に怒り。騎射五人。まで。偃月刀に。うけたとる。李永芳は。聲をか。一貫何ぞ  
早く。降らざるや。羅一貫。大音わげ。李賊々々。一貫。これ好漢。何ぞ。敢て。偏に。降らんやと。罵れ。李永芳。金鼓を。鳴  
し。二度兵を進む。羅一貫。又三たび。追退けたりける。毒箭の。痛痛く。惱み。騎上に。堪ざりければ。自から。城壁に。投  
し死す。張鳴鶴も。賊兵の。敵すべからざるを知て。自ら首を。刎たりと。斯て。王化貞。十餘萬の。援兵。河を隔て。たれ  
ば。坐ながら。廣寧の。火を見。自ら。齒を。叩き。牙を。嚙と。雖ども。安大人。貝勒王。賊兵。十餘萬に。西の。堤に。遮ぎられ。空く。鳥  
銃を。放ち。戦ひを。挑む。貝勒王。黄金。け。風盜に。鉄金。絲にて。裝たる。鎧を。披掛。大宛の。驕騎に。騎り。自ら。白羽。扇を。整  
げ。招降旗。天風に。翻せり。王順撫。河を。隔て。賊軍の。旗勢。曳々たる。み。不審し。疑。から。く。廣寧。敗れたる。あら  
ん。斯て。の。過じと。十餘萬の。兵。河波に。馬と。騎入る。清の。先鋒。安大人。渡口に。馬と。走らしめ。丈八の。蛇矛を。あり。わけ。

散花微塵に敵と倒れ事恰も秋風の草を偃どが如し。安大人が十萬の兵大將の矛さきに。各々銳氣を添へ。河より上る敵を縦横に斬り流す。先鋒孫得功の。王順撫が腹心の將たりしが。忽ち心を變て軍中に呼入り。疾く奔り疾く叫び。頭を割て降る。これより因て。遊兵多く敵に降り。若干の騎將の。安大人が矛の下に斬り伏せらる。歩陣の兵の。過半の逃げ回り。遺兵の騎將の屍を剝。甲を偷み。馬を奪ひ奔る。左先鋒の江朝棟。單騎にして。王順撫が前に至れば。左右の將卒のみな離れ叛く。王順撫の戰慄し。肌に粟を生ず。朝棟が手を握り。この如何なる變々と問ふ。朝棟の馬にのせ。俱に落行んとせらる。一箇の騎なし。遂に扶け騎るに。麻々として進ませ。せん方なく已が騎に代り。せ。亂兵の内を逃る降兵の王順撫を擒にし。清け實を食らんと路を遮る。朝棟これを防た。關陽に至れば。逃たる將卒馳あつせ。其勢千に盈んとす。然るところに鄭經の數萬の兵諸とも。右屯より至り。馬を飲み折柄王化貞の數騎に扶けられ行進ふ。王順撫の。經を見哭泣する事一聲。鄭經界かへり視笑て曰く。日頃口辭に言れつる十萬の兵。遂に涼陽を踏中せらるべきや如何ん。王順撫曰く。廣軍已に賊に陷る。鄭經界が曰く。運一運一。此時賊兵東へ趕行し故に追運るなし。依て鄭經界を回せ。王順撫の。答るに語なく數騎の朝棟に扶けられ後に從ひ奔る。廣軍の敗軍涼陽に達する程に三箇の技。方震瑞も單騎として同く逃る。其外各道の臣互に兵を捨奔りける。惟松山の高邦佐の。兵多く逃去ければ。自ら沐浴し衣冠を整へ。西のかた帝都を望み拜し。縊れ死す。僕高厚も共に死に殉ふ。

鄭芝龍坐事下獄

北京の朝には。廣軍敵に陷り。王順撫の十萬の師を喪ふ。敗北するに及ぶとも。鄭經界これを援ふ事能はば。速の諸將或は戰死す。或は夷に降り。其禍延て各鎮に及ぶと云ふ。塘報なり。風聞類りなれば。帝震怒をなやまし玉ふ。魏闢が黨鄭芝龍の。楊遊左光斗つねに。推舉せし故に。崔呈秀これを天監録に登せ。魏南樂が朱國元れば。此事に坐し早く獄に下し。王化貞と同じく。刑に處すべしと廷議す。御史楊廷奏して曰く。夫取の贏輸の。兜鍪家の常にして。或は勝ち或は負く。漢楚の戦ひ。項羽五十餘度の勝を窮むと雖も。烏江の敗に天下漢は歸せ。漢高帝に五十餘度の敗ならんや。是乃敗もまた勝也。漢は楚兵の志を知るが爲に。後の勝を得たり。鄭經界一たび逃れ往て。遼民の心を知り。會て廷議に臨み。城を守るの先者を論し。廣軍を第一の要害とし。且遼民の信し難きを述へ。今に至て。其言方に爽はば。惟王順撫の軍旗の事に暗く。鄭經界が謀とを納す。魏闢の相忤ふ。故に大なる屏に陷る。鄭經界が智謀。豈に王順撫と日を同あして論せけんや。罪の同ふして。罰の異也と奏す。魏忠賢の魏南樂。崔爾州と。相議して曰く。王順撫の胸中に一箇の兵策無し。左右の孫賊が逆反するを知らず。胡笳の聲を聞風鶴も皆兵なると。驚き我鐵騎鼓撃を忘れ百里の外河を隔て。廣軍を棄る事履の如し。自ら十萬の軍を棄る罪上刑に服す。鄭經略の才。氣魄よく一世を睨み視ると雖も。再び開を出て。經略に任するに及ばず。順撫使に相忤

散花微塵に敵と倒し事恰も秋風の草を偃せし如し。安大人が十萬の兵大將の矛さきに。各々銳氣を添へ。河より上る敵を縦横に斬り流す。先鋒孫得功。王順撫が腹心の將たりしが。忽ち心を變て軍中に呼入り。疾く奔り疾く叫び。頭を割て降る。これ又因て。遊兵多く敵に降り。若干の騎將。安大人が矛の下に斬り伏せらる。歩陣の兵。過半の逃げ回り。遺兵の騎將の屍を剝。甲を偷み。馬を奪ひ奔る。左先鋒の江朝棟。單騎にして。王順撫が前に至れば。左右の將卒のみな離れ叛く。王順撫の戰慄し。肌に粟を生え。朝棟が手を握り。この如何なる變々と問ふ。朝棟の馬にのせ。俱に落行んとする。一箇の騎なし。素腕を扶け騎るに。蕭々として進ませ。せん方なく已が騎を代り。せ。亂兵の内を逃る降兵。王順撫を擒にし。清け實を食らんと路を逃ざる。朝棟これを防た。閭陽に至れば。逃たる將卒馳あつせ。其勢干に盈んとす。然るところに鄭經の數萬の兵。諸とも右屯より至り。馬を飲み折柄王化貞の數騎に扶けられ行進す。王順撫の經を見哭泣する事一際。鄭經がへり親笑て曰く。日頃口辭に言れし。十萬の兵。遂に閭陽を蹙せらるべきや如何ん。王順撫曰く。廣軍已に賊に陷る。鄭經が曰く。遲一遲一。此時賊兵東へ趕行し故に追還せし。依て鄭經を回せば。王順撫の答るに。語なく數騎の朝棟に扶けられ後に從ひ奔る。廣軍の敗軍遊陽に達する程に三鎮の接接。方震福も單騎として同く逃る。其外各道の臣互に兵を捨奔りける。惟松山の高邦佐の鎮兵多く逃去りければ。自ら沐浴し衣冠を整へ。西のかた帝都を望み拜し。絶れ死す。僕高厚も共に死に殉ず。

鄭芝龍謀事下獄

北京の朝には。廣軍敵に陷り。王順撫の十萬の師を喪ふ。敗北するに及ぶとも。鄭經を援ふ事能はす。迷の諸將或は戰死す。或は夷に降り。其禍延て各鎮に及ぶと云ふ塘報なり。風聞類りなれば。帝震怒をなやまし玉ふ。魏闡が黨鄭芝龍の楊漣左光斗つねに。推舉せし故に。崔呈秀これを天璽録に登せ。魏南樂が朱國公れば。此事に坐し早く獄に下し。王化貞と同じく。刑に處すべしと廷議す。御史楊漣奏して曰く。夫戰の蕭輪の。兜鍪家の常に。て。或は勝ち或は負く。漢楚の戦ひ。項羽五十餘度の勝を窮むと雖ども。烏江の敗に天下漢は歸す。漢高帝に五十餘度の敗ならんや。是乃敗もまた勝也。漢は楚兵の志を知るが爲に。後の勝を得たり。鄭經一たび迷へ往て。逸民の心を知り。會て廷議に臨み。逃を守るの先着を論し。廣軍を第一の要書せし。且逸民の信し難きを述へ。今に至て。其言おに爽は。惟王順撫の軍旅の事に暗く。鄭經が謀とを納す。鰐牛の角に鱗鱗の相忤ふ。故に大なる辟に陷る。鄭經少智謀。豈に王順撫と日を同あして論せけんや。罪の同あして。討つ異也と奏す。魏忠賢の魏南樂。崔瀾州と。相議して曰く。王順撫の胸中の一箇の兵策無し。左右の孫賊が逆反するを知らず。胡笳の聲を聞風鶴も皆兵なるを。驚き我鐵騎鼓撃を忘れ百里の外河を隔て。廣軍を棄る事履の如し。自ら十萬の軍を喪ふ罪上刑に服す。鄭經略の才識氣魄よく一世を睨み視ると雖も。再び開を出て。經略に任するに及ぶ。順撫使に相忤

ひ。賊兵廣率を襲ひ。自ら師を出し防ぐ事能はせ。是乃ち勝ハ以て俱に吾名を成とべし。敗せば吾言の言たる  
 驗あるに誇らんとす。是まさに經畧巧と以て拙と爲す。經畧若し願撫と同く伐ち。鎮江火攻の勢をなさば。死す  
 とも功を奏すべし。大兵既に敗れ願撫走るに及て。先檢關に奔て強剛の氣。一世を盡んと圖る。然れども智計な  
 くして師を喪ひ。地を失の罪を勝事能はず。これを楊嗣比とされ。更に一度逃るに罪あり。袁應泰に比され。一  
 の死を缺たり。王化貞。鄭芝龍の。同罪にして。首を九邊に傳へて可也と奏す。帝これを然りとし。王化貞。鄭芝龍と  
 召し捕へ。禁獄し玉ふ。楊逆の。芝龍が罪を救はんとする。魏閩に阻てられ其情を達する事能はず。斯て鄭芝龍の  
 獄舎より下る後。既に幾個の朝暮を経て。三月に向き。自ら聲を呑み嘆じて曰く。明の實將に傾きなんと昔し周の  
 文王の。殷の紂に拘り。幽里に在し周易を演べ。萬世の嫌疑を決し玉ふ。予文王の聖に非ざと雖も。自ら一二の兵  
 法を知り。西洋南蠻の火攻に熟と。余誅よつか。此器萬世に傳ふべからせ。況や選將。將權召募。練藝。器械。軍禮。  
 戰訣。陣法の秘。輓近の兵科。武。これを鍛鍊せず。予末世の將畧。一書を著りし。弟楊逆之豹に遺し與ふべしと。  
 自ら指を嚙み。筆に換て。十卷一帙の編を成し。題して經國雄畧と名づく。魏閩の周欣。一たびこれを讀み。慨然と  
 して涙を墮し。嘆じて曰く。此古今の兵法。胡虜を防ぐの干城。漢の霍嫺姚。再び生ぜともこれに遇べからせ。鄭  
 芝龍の。蓋代の名將なるを。王化貞の如き愚將と同じく罰を行ふらん。豈天啓をおろれざらんや。今の朝廷の。

魏閩が線索に。實尉相混せ。如何にも議り芝龍が刑を免じなば。且國家の福なりと思ひ。密かにこれを。家弟の周吉  
 又謀る。周吉暫らく首を便し答へて曰く。天啓帝曾て白鶴山の。張冠道人を徵れ。房術嗣を求むの薬を請玉ふ。  
 道士進むるに。海狗腎丸を以て奉まつる。帝この薬を用ひ玉ひてより。三年椒房雲雨の宴全く陽痿の患無し。然る  
 に道士已に。白鶴山を下り。其往ところを知らず。今正に。仙藥盡なんとす。諸醫院に詔りして。海狗腎を索め玉へど  
 も。醫令惟本草に載るところ。其腥膻厭なるを知て。未だ其狀ちと看たるなし。帝ひとへ道徳と索め玉ふ。鄭芝龍  
 の。海南泉州の。人也。必は海中魚物の産に精からん。若し那の狗腎の形狀を知らば。余速やりに醫令魏閩に諭し。罪  
 を購なふべし。周欣喜み。獄舎に往き。鄭芝龍に斯と告く。芝龍莞爾と笑て曰く。海狗の産吾よく知る。嗚呼一箇  
 の武將。豈に生を食する道士ならんや。夫孔明死して已に千數百歲。其八陣の法を學ぶとき。則ち是孔明が徒也。惟  
 恐べく。這一書を泉州に贈り。兩弟魯魚の誤りを訂し。梓に鏤て萬世に壽させ。芝龍の永く死せと對へ。敢て  
 命を惜まざれば。魏吏の。大だ義を感じなと欽慕して。已にりたり

○ 卷之五

鄭芝龍 求 藥 渡 日 本

大醫令魏閩の詔を受。海狗腎を求めんため。都下の藥舖を普く尋ね廻れども。皆是實の驢腎にて。贗せ偽れる物な

れば。時珍が書る綱目に違事のみ多かりけり。斯て。如何ぞべきと案じ煩ひ居る處に。或人來て。實に海狗腎の眞偽を知んと思召す。急ぎ鄭芝龍を召出され。御尋ね候ふべし。當時彼藥品の眞偽を辨じ申さんものと。彼にしく者わらしと懇懇に告げられ。すなわち獄吏周欣を召し寄て。事の由を探り聽しむ。周欣歸て芝龍に問。芝龍が申す所をば。有のまゝに答へける。鯨膾大に感服せ。密かに楊述に相議り。遂に天啓帝の詔を降し玉つて芝龍を徵され。刑を免。泉州の舊職にぞ復し玉ひにける。芝龍の死罪を免され却てまた舊職にやで復さる。君恩の莫大なると再拜頓首したりけり。時に大醫令張卿進み出て問て曰く。公よく海狗を知る。國家の爲に其奥を惜むと勿き。芝龍腫で奏きて曰く。臣萬死を免かる何ぞ。靈秘を盡さいらんや。夫海狗と申す。膾膾獸の一名にて。醫家の論するところ其狀一ならず。或狐の如く長尾ありと云。或鹿の如く頭。狗に似て長尾ありと云。其外腎を收るに。膾を運ねとる故に膾膾と稱するなり。脾腎勞極の藥とぞ。臣少りし時。舉子の作業を事とせ。東南海に舊嶽し。東がし蝦夷を窮めし時。日本松前の海濱に船を泊む。蝦夷來て漁獵するをみるに。一物あり。魚にして魚に非ず。獸にして獸に非ず。頭。狗の如く。身の長さこと二尺ばかり。鬚に蒼黒の毛ありて鳥の翼の如し。魚尾長きこと五寸ばかり。海上に浮沈す。牡魚最とも淫欲にして。牡魚十五を帶て。氷面に浮み出づ。其時蝦夷小舟を以てこれを射取り。外腎を截て陰乾にし以て。日本に販。膾膾の勢とて養生の家買取て賞玩すると甚し。蝦夷常に這物を幸し

食ふにより。其人耽狂にして。一夫十妻を娶るとなり。中國醫家の論せるところ。太だこれに違ひたり。もし海狗腎を求り玉つんと思召す。日本に使を渡さる。に如ちと奏聞したりける。帝殆ど喜ひのたまはく。秦の徐福が不死の仙藥と東海に求めしも。日本熊野山に止まりたりしと。彼國の使の僧周信が時に味じ。洪武の朝に煥然たり。重て詔を賜ひ鄭芝龍と使となし。早く日本に渡り海狗腎を求め來れどありけり。芝龍腫で對て申しける。日本海國たりといへども。神王國を開て二千餘歲。王姓統と紹で竟に篡逆の主なし。前朝の始。日本親王關白豐臣秀吉。朝鮮と犯せし時。中使渡海するに及で關白語命の文のをこれることを恐んで終に封を受ずして和親の議破れたり。然るに今臣をきて又使たらしめ。國王これを疑がひ却て禁錮せらる。こともや有へし。惟臣をして閩海都下れ買船に附載せしめ玉つ。久しからせして藥を求得べしと。予理を正きて奏しける。帝芝龍が申す所一々疑慮にのなへりとして。内庫の銀三萬兩多くの絹帛賜ひつ。買船に附載て。日本を渡り。芝龍の勅を承り。北京の都を出泉州安平縣の本城に立回り。弟芝豹海邊に相議り。福州の買船の中財附。荷物商賣諸事の。張三貫。長海上の。乗方を。主。洪九貫。兩人の。よく海潮を知れりとして。彼等と召具し。日をあらみ。厦門よりして出船の款乃れ。水面白く。颯風に心と任せたり頃。七月半。過ぎ。や。秋風も冷かに。立白浪の時ならぬ。雪かとのみそあやまたる。船もや。く。行ほどに。蓮花洋を過る時。驟に雲の脚早く。風をさすべく。吹をさして。逆浪山のおとくなり。舵工。舵を司と。驚。亞



班帆柱として、橋を下さんとする處よ、不思議や海霧の其中に、一つの島ころ涌出たれ總官、船中の肝、船主、商賈を司とり、なんと等が舟を寄んと圖りしに、鄭芝龍公儀をつとむ、なんの松の尾にわるに坐し、香工、菩薩に香燈を呼、樓楹の上、遠視する樓に坐し、香工、菩薩に香燈を呼、菩薩棚に香燈を懸げ、工社數十人に下知をなし、急ぎ金鼓を打鳴し、喇叭高く吹せけり。頭破、李二貫問て曰、相公何ぞ姓、菩薩と号せるや。芝龍咲て曰、汝等これと知せ、やわの嶋は海獸なり。其形四方にして、青よ水、鱗生ひ。左右の翼張り出れ、島の如くに見ゆるなり。余其職をみすべしと。火藥を倍し大砲とうちばなつこと數十、其聲、轟として海中腰ひ動きけり。わんやと人々見る處に、島ぞと見へしが、跡もなく。海底に引て入り、其吼る聲怖しく。譬へ、半夜の鐘の聲、客船に響

く如くなり。合船の人身の毛立ち息をつめてぞ居たりける。芝龍が曰く、道の船もし誤まつてあの海獸に觸る程ならん。必す砕け沈むべし。海賊の妻が海賊と云へるの如く、船なり。恐るべし。恐るべし。危き所を運れたり。いさや香風を運とてし。普陀山に舟と泊り、潮音洞に登りつ。觀音菩薩を拜したり。寺僧出向て芝龍に語りけるやうに。當日日本の僧、慈入來し。觀音の聖像を携へ、本國より回りに。此洋を渡るよ及んぞ。船すつて動かさうければ。慈、自ら。觀音菩薩に誓ひ。聖像を此洞に移しぬれば。船すなりと誓ひ。因て、慈、此島に留まりて。殿宇を創り、觀音を安置せり。國朝萬曆三十五年、動遷して。觀音永壽寺と號りて。即、落成、佛龕の彫刻を出し。芝龍に拜觀をさせけり。芝龍の寺に歸り居て、風を占ひ、しして、港に數日の間、海留を。寺僧の之を慰めんと引、建、諸、遊、歴し。井、洞を探り、尋ぬれば、徑、深、高、く、巖、奇、石、廣、く、平、ら、なり。琪、花、瑤、草、香、を、交、へ。異、獸、珍、禽、聲、を、和、せ。ま、ご、と、洋、中、の、絶、境、也。中にも、梵、音、洞、と、云、る、の、普、陀、界、の、東、北、麓、竹、林、下、の、崖、に、在、り。普、陀、此、に、應、現、し、玉、へ、り。上、の、松、竹、蕭、森、と、して。下、の、波、瀾、洄、洑、たり。僧、の、紙、墨、を、數、々、來、つ、て。芝、龍、に、題、を、請、た、け、る。芝、龍、乃、ち、應、に、應、じて、書、し、て、曰、く、梵、音、深、莫、測、古、洞、佛、憑、依、蓮、拜、衛、屋、立、龍、朝、板、浪、飛、蒼、松、圍、作、宇、紫、竹、護、成、屏、紺、徑、花、迎、日、香、滿、上、客、衣、芝、龍、題、

風も漸々定れ、蓮花洋の沈家門より出船し。西の方旗頭、諸所の名を打過ぎて、直ちに東波の定海關に近づける。

此乃ち唐の世の明州の津に於て。日本渡海の濤なれり。再たび風を相待て。遂に日本寛永二年乙丑八月五日。肥前の長崎に著にける。斯くて芝龍の崇福寺の唐僧。忽然に多くの銀を寄捨し。大小の譯官に賄ひし名を一貫と改めて。其地の僧師。熊谷なる者と兄弟の義を結び。街居してありつるが。實に明季の亂を避く芝龍の心いかならん。後丸山の遊君某なる者を購て。妻となし。麟兒を産む。福州の買舶の來る度毎に。どかくの問答むつかしとして。平戸の島氏宅に往き。外鬻を業とし世を渡る。今日日本に傳ふる所の大砲。火礮等。多くこれ鄭芝龍に學び得たりしとかや云へり。芝龍平戸の民人の爲よとて。析宇の占となしける。吉凶其驗恰神の如くなり。或時本田氏の諸侯。東武は朝親と其倍臣侯の安否を問んとて。田の字を書して見せたる。芝龍曰く曰く。田の土也。穀物を生ぜ。上へ抽せ。則由也。是智慧あるの人。下へ挽く則甲也。十千の長。正に人に甲たり。上下は貫ぬく則申也。神と通ず。凡人に非ず。若し打開くとき。門となる這の人。必は盛運を開くべしと答ふ。其才智の敏なること。大概かくの如しとなり。實に功を立。隣人を打撃けたること。も。ことばりなり。

楊左坐事勢錄

天啓六年の春二月廿八日。北京に雨日を経て。日に光なく。旁らに又一つの黒き日あり。人々怪しみ恐ること限りなし。其夕空中に叫喚して。千軍萬馬の聚散する如し。或は大砲を放つが如く。天に響きて。鳴動を。海邊所々の州郡に。日々かゝる不思議あり。占者これを考ふるに。是天の戒なり。廷臣上に聞く。庶民下に怨み。政事荒むがゆへにかゝる天災のをこれる也。古へよりして。此變を亂世の凶兆とせしこと。肩をひらめて言へり。されども天啓帝これと願ひ玉を。して。宮房の御遊に。國政を忘れ果て。只何事も魏闢ひとり任ぜられければ。彼が勢ひ盛んにして。恣に權を執り。魏廣微の崔呈秀など云ふ。我に劣らぬ佞人と心をあひせ。忠臣の上る奏疏を。押隔無理に。邪正を言亂し。妄に穿鑿しける程。朝廷の政道。是非何れとも定まらざ。手の裏かへす如くなり。楊漣こそを見る。忍びず。密に左光斗。魏大中。周宗建。李應昇。黃尊素。許譽卿等と相議り。魏闢が二十四罪を疏し。直奏せんと圖りしが。奈何にせん。朝政のどろく昔に復らざる時節。や到來したりけん。早く魏闢の線索に。楊漣。左光斗。兩人の容姿が。魏にすあひにける。比しも帝暫の内朝見を受む。玉のね。楊漣直奏せんす。なく。次に從ひ上疏せり。されども朝廷押さへて。魏闢に與しありければ。忠言中路に阻てられ。達せざる。ころ本意なけれ。魏大中。周宗建。李應昇。黃尊素。許譽卿等。憤はり。前後數通。疏を捧げ。楊漣と相扶けり。時に魏闢。魏闢と矯りて。獄舎をこしらへ。説して曰く。楊漣。左光斗等。が如き。書を讀と。雖とも其性も。森曲にして。賢と妬と。國家の大典を喪なへり。迹の其張本にして。左のふれが。潤色たり。帝前閣の喪に。在す中。楊左が。意を以て。御案を移し。李妃を宮中より出せし。是正も。國家の大孝も。傷つけた。り。矧んや。黨を結んで。内輔の臣を。説し自ら。國柄を。奪ひんとす。罪正に。大刑に。中れり。とて。楊漣。左光斗。兩人を。獄舎に。

ころへ入にけり。周宗建胸を焦し上言やう今朝廷の旨と承はるに。たゞ事に候ハせ一定是ハ狐狸ヲ附ラひて。玉體を憫まし奉ると覺えたり。故を如何にと申すに。先御擧用と乗り司る魏忠賢と魏閹が本々目に一丁の字を講せ。心は大義と存せざ。假令志慮とつくすとも。何の嘉き謀かこれ有ん皇爺よくこれとおもひ玉へと。憚る所なく不奏しける。帝逆調となつたしく。宗建。大中。應昇。尊素。梁卿。楊左が徒黨なりとして。即日ハ職を罷られけり。さて楊漣ハ獄中に在ながら。魏閹と罵と甚し。魏が黨惡とて枷械を加へ是をいましむれども。猶罵て止ざる故上下の齒をくじり抜き。嚙を嚙せ置たれば。物を言べきやうもなし。憐むべし楊漣ハ。かゝる憂めに遇と雖も未だ義心の屈せざして。惟兩眼を噴かし唇を動かさばかり也。獄吏ハ忠賢が命を受けて。大に呵責しわへなくも。土囊にて壓殺す。左光斗ハ。魏廣微に深く惡され。獄舎にて終に飢てぞ死にける。魏大中ハ。朝廷より捕ハれて行く。其路次呉の周順昌が門前を過るるに。順昌やがて出向ひ。酒肴を以て餓らし。黃泉の別とならん哀しさに。互ハの袖をぎりしが。特に大中が女を請ひ。婚を結ぶの約となす。斯て大中ハ獄舎に獨り繋れ空く日數と送しがある時獄舎のまへに人影あり。能よく見れば。とが兒の學海なり。徒既になつて。問道より密りに忍び來りつ。天に號び。地に哭す。大中は。しは消入しが。涙を押へ云々る。學海よく聞け。今の身を營い。鳥の巢の覆へりたる如くなり。然らば何ぞ其卵完かるべきやうのなし。速かに歸れ學海ハ。父の言葉と聞よりも。膽落肝裂け。目も瞑て。天に禱り。身がわりし。

父が難を救いんと。命を捨て悶へけり。されとも其甲斐あらせして。大中終に斃しければ。故郷に葬り借し施し。朝夕號び泣きける。湯水も咽に入らせして。程なく空く成にたり。周宗建ハ。屢の上疏に。客氏魏閹の罪を論定る故。獄舎に繋られ。鞭打れ。身の骨摧け。偃臥たり。獄吏あざけり打笑ひ。かゝる時節に至りても。魏相公一丁の字を讀せ。と云べやと罵しければ。宗建眼を見開きて。獄吏をいたと睨みける。齒落唇裂たれば。聲を出すに能はして。一鞭の下に。忽ち血を吐き死てけり。楊漣ハ。湖廣の典試として。文章一時に名わりしが。楊漣が上疏の草すと。忠賢傳へ聞しより。これを惡むこと甚し。こゝに趙南星。高攀龍。兩人相讎し。崔呈秀よろしむるに。より。忠賢詔と矯て。即ち官籍と削り去昌期ハ。元彼等とむりせじく京を辭るの日に當り。酒と饗して別をすすと聞。魏閹いよ。憤れり。又忠賢毒藥を營みて。玉泉山に碑を建んと人をして文と請せしに。昌期大に目を瞞らし。これに對へて云ける。吾平生に。諛の詞を作るとを耻づ。而るを況や何ぞ敢て逆黨の旨に順んやと罵しりけり。魏閹この言を聞もわへせ。是も亦楊左が枝蔓なりと怒り。旨を矯り禁獄して。やがて死罪に行ふ。また高攀龍ハ。家居せしを籍に記して捕をへし。と。縱騎の者の至ると聞。自ら沐浴し香を焚き。手づから遺疏。天子へわぐ。を書て。子の世儒ハ。授け。夜半ハ。かりに及んで。家人のよぐねいりたるを伺がひ。密に自ら起て。衣冠を正し北闕を望む。頭を地につけ再拜し。園池に身を投み。空く死せり。翌朝父の見えざれば。世儒驚き馳まひり。漸々池の中より。空しき屍と引揚て。悲む事限なし。即ち



竜が書置し。遺跡と泣々君にさしげ奉る。其言は曰く

臣雖削籍舊屬大臣大臣不可辱辱大臣一則辱二國矣謹北面以效屈平之遺君恩未  
報願結二來生一留使者持此奉三皇上一

忠賢これと覺大に怒り。再び言と矯りて。世儒と捕へ殺しぬ。凡魏闈に捕へられたる群臣の。皆其家を籍につけ。  
家宅財寶残りなく。官庫に取納めける此法古來無しと忠賢忘に之を行ふ。楊左二人と始として。犯さぬ事と坐せ  
られ。獄に死したる臣の數。つもるららみの冤鬼となりの。後いかなる報に逢んかと人々ひろめ居たりける

吳縣民夫死後

さて吳縣の周順昌の。慈仁を以て民を撫て。節義を以て士に接りける程に。民庶のこれに懷くこと。骨肉の親に異  
ならず。順昌先に魏大中に相識し。婚を結びし事より魏闈に深く惡まれたり。或時忠賢勅詔なりと矯て。周順昌  
と捕へよとて魏闈大勢相催し。吳縣をさして急に馳向ふ。已に吳縣に入しかば。田爾耕許顯純など聞るたる佞臣  
等眞先かけて進み來る思ひ設けぬ事なれば。吳中の士民沸が如くに騒たわへり中に陳文瑞と云士あり。順昌是を他  
に超て挺で用ひたりなきの憂喜ひとりの思ひをなし。夜半に來り見へんことを請ふ順昌の。常の標にて對面し。  
交りの入しきと忘せして。來られしころ嬉しけ。余魏闈が爲に惡るればこの難。兼て思ひしことなり。今更何ぞ楚

四の哀みをなすべきと。事もなげに苦されども文瑞をとりめ妻や子の床の四方を打圍む。聲をばかりに泣立けり順  
昌顔色變せせして。彼等の泣を制し止め。案上に白き榜わりけるを顧みてこれの前龍樹庵に僧某が頼みたる處  
るたして吾既に醉睡せり。もぎや形見に書置んと。筆を潤してこれを書す。字は大なる事斗の如く墨痕ますく  
強健なり斯て筆を抛うち門を出るに吳縣の人民喧すしく錢けせんとして聚りて心に言わへり。使廳に巡撫毛一覽巡  
按の徐吉も同く出順昌を待つ。順昌いつしうにとやくも。凶服を著。頭を俛して謹んで罪を承まひる。茲に順  
佩章と云る賈人の子ありしが。元來力つよくして角觥を好み任俠す。周順昌にのさされみ親しみも無ししが。無實の  
罪を蒙りて。獄に下るを知らぬ。餘所に見なして遇なんの。男兒の氣象に非るなり。いで身にかへて救はん。心  
を決し。香を焚きまつ盟をぞなしにける。これに與する者共の。順昌が與夫周文元。士民の馬傑。鬻衣の楊念如。牙僧  
の沈楊等五人。街頭に打出て同じく柝を擊ち鳴し大音揚て呼び號ぶ且大ある糞臭の香爐を大地に置き義に赴く  
士民よは。俱に天に誓ひをなし。一瓣の香を燃せしむ。吳縣の士民等。年ころ順昌が徳を懷さるるほどに。一朝  
にして香を齋し盟を結ぶ者。一萬人にぞ及びける。五人の者首となり。使廳より見りてこれバ牙賊森々として。器械  
を多く陳ね置き。武衛嚴しく備へた。思ひ定めし者共の何かい少しも遲疑すべき。顏佩章まつ進み出兩臺使毛一  
覽徐吉が前に跪き。順昌が無實の由を訴たへて。身と以て代らん事を願めけり。楊念如。馬傑。沈楊。周文元も同じ

く前と認たされ、萬餘の百姓共に號哭す。其聲城隅も崩るかと思覺たる。曉より午に至り、數訴人追々加はり、駭た立てり。總騎等怒をなし、魏忠賢の旨に因て、順昌を捕ふる。何ぞ妄りに旁より訴されば、とて免さんや。そこ立退と罵りけり。魏忠賢曰く、旨の朝廷より出るか。又忠賢より出たるか。魏忠賢曰く、旨若し忠賢より出さんば、將誰人か出すべし。顔佩章、馬傑等が大に呼で曰ける。今までの天子の詔と恐れつるが。忠賢なんぞが捕あるを。何の怖る、事わらんと。罵る聲に、與夫の周文元、ぬきん出て、眞先に前んだる。魏忠賢を一人かゝり、大地にとおと抛うて、血を吐き、忽ち死にけり。沈楊馬傑、念如、佩章、四人の者、一度にとつと立あがれば、一方の人民の海が如く群りて、就ひかゝる。予怖るしき、佩章大に聲を揚げ、息も衣たるを離死せと叫ひけり。百姓の空拳を怒し、立騒ぐ。魏騎の矛を執り、來り撃んとするを、馬傑、念如等これを奪ひ却て、魏騎に傷つけたり。官の使臣の閉上たのり、匿れんとすれば、文元、佩章、沈楊等、力を極て衝落し、垣を踰て逃るを、擊すり、或は履にて腦を踏にじり、拳を以て目を打潰し、容易ならぬ。魏使も急に兵を召聚め、自ら衛て居たりけり。始再びし提騎共、皆散々に逃匿る。陳文瑞密かに周順昌を打向ひ、公不幸にして、この禍に遇ひ玉ひぬ。忠良全たうらじと曰ひければ、順昌答へ曰く、やう。我一人を以て何ぞ禍を蓄里に遺さんや。今我都に赴むるに、必死獄に死すべきなり。死せば直ちに泉下に入。高皇帝に訴へて、速かに忠賢が元兇を殺し、殛し、君の側なる惡を清めんぞ。公他日我爲に忠臣傳を作と言ひ、自ら閑行し

て京に赴き、魏使の難に難がけける。毛一路、吳民の變と奏聞しければ、勅詔と降し、玉ひ五人を捕へさせらる。に、顔佩章を始として、殘る四人の義人共、何れも遁るゝ意なく、自ら姓名を名乗て出で、跡を運と請にけり。獄に下るに及んで、心もよゝゝ確固として、變ざる色も更になく。たゞ順昌に擬ひ死するとも、姦臣と俱に食はり生て、何の益わらんと口々にころ罵れけり。順昌が獄死したりと聞しより、五人同じく明書に泣て、聲をぞ與ひける。魏の魏の鳴毎に、そのや最後の近付と、喜び勇んで居たりしが、刑に臨んぞ、深よく、相顧みて、魏と咲ひて、頸を討れたる。覽るもの、聞もの、諸共に、涙と流さるゝ。其の賢士大夫、これを義也とし、首を請て、屍に合せて、これと同所に埋み、其爲す所を碑に造りし題して、五人が墓と云ふためし、希なる義人なり。

天啓帝詔二信王

楊進、二十四罪の上疏に因て、魏忠賢深く怨みたり。其事に坐せられ、獄死せる名臣に、太僕卿左光斗、都御史高攀龍、都給事周宗建、御史魏大中、吏部周順昌、黃尊素、李應昇、許譽卿等、三十餘員、魏忠賢の爲に惡まれて、籍を削らるゝの官員、故擧するに暇なし。朝廷のこれが爲に一變ぞ。魏忠賢の登庸ゆへ、きと同志録も考へて、黃克楨、王紹徽、王永光、徐大化、霍維華、阮大鍼等、各々新たに二圈三圈の朱を加ふ。忠賢の實微と密に謀り起用して、大官高位を授くれり。朝廷滿座の人々、皆々魏忠賢が方とる。路官諸使まで、皆この線索の徒より出づ。魏忠賢の日夜忠

賢に阿なり。諸州諸縣に命をなし。忠賢が生祠を建させ。千秋の祭をならしめたり。崔呈秀の言に曰く。相公の政事のさま。實に伊尹の徳に比せし。楊蓮を誅せられたる。孔子大聖の少正卯と誅し玉ふに孰若き。妄に誅し疑りし故。此より忠賢を尊するの詩文。多く孔子の徳に比し。ひたすら阿り諂ひける。忠賢の本よりも。一丁の字を知らざれば。自ら己が徳行れさまに孔孟に及べりと。獨り高ぶる。朝廷の評議心に任せつ。旁若無人に見るにけり。姪二人あり。厚く恩蔭と蒙む。錦衣衛に居して。緝捕をつみある人。追贓と奉行を司とる。忠賢先に大學士。兼諫に命。三朝要典を修す。帝これを御覽じ。既論して萬世に行ひしむ。監生陸萬齡奏て。忠賢が祠を國學の旁に建ん事を請ふ。其言。孔子の春秋を作り。魏公の要典を修すと論。帝是を許さんと。思せしが。天啓七年七月の頃。玉牒不豫にましませば。八月廿日。急に御弟信王を徵し。詔し玉ふに。汝今より當に堯舜の君たるべし。中宮に事へ政の忠賢に委よと。信王勅を拜し。謹で還り。還られ謝して。宮中を出玉ふ。斯て廿二日。帝崩御ましませば。忠賢自ら宮を出で。急ぎ信王を迎へ入れ奉る。信王固より魏闈と疑がひ。必甚だ危がみ。思し召されければ。供御を袂に入玉ひて。大膳房の物立て。少も進らざりにけり。群臣の王の消息と聞かんが爲に。屢く殿門に至れども。宦者拒んで納れざれば。是夜信王の榻の下に。獨坐して。居玉ひたる。夜半に至て。一人の宦者。わり劔を携さへ。過たりしを。信王これを怪しめて。宮中希有の物なれば。御覽あるべしと。伴はりて。これを取せ玉ひ。机上に留め置れつ。重ねて價を

賜ひるべしと。その玉ひける。又宮中巡視の者を召れ。四邊の景況を御尋ありて。酒食を賜ひ。これを勞はせ玉ひける。よ。巡視の宦者。酒に酔覺え。之を歡聲を發しければ。殿門の外に在たる羣臣も。始て心を安じけり。黎明ひ。百官哀を訴ふれば。宦者の入殿し。哭したり。司禮王。朕乾と忠賢と。喪次。御房に在ければ。惟王體乾のみ。其事。王と。禮部の官に相隣り。喪禮の儀。備へけり。忠賢は目も腫て。言を事な。ならざりき。されども。百官出で。後。兵部尙書。崔呈秀を近付て。人を辱す。け暫く相談る。何事にてか。有りつらん。外人は知らざる所なり。宮中の流音に。此時忠賢早く。信王を殺し奉り。自ら位を篡んと。圖りし。崔呈秀。これを背せ。時。いまだ。至らず。て。これを傳むと。云ひぬ。

明清軍談國姓爺忠義傳卷之一終

明治十六年七月三十日 鵜刻御届  
同 年八月十日 出版

定價一冊金三十五錢

鵜刻兼出版人

東京淺草區新福井町二番地  
東京府士族 豐田政恒



畫工

同 四ッ谷區元鰻河橋七十八番地  
金森南塘

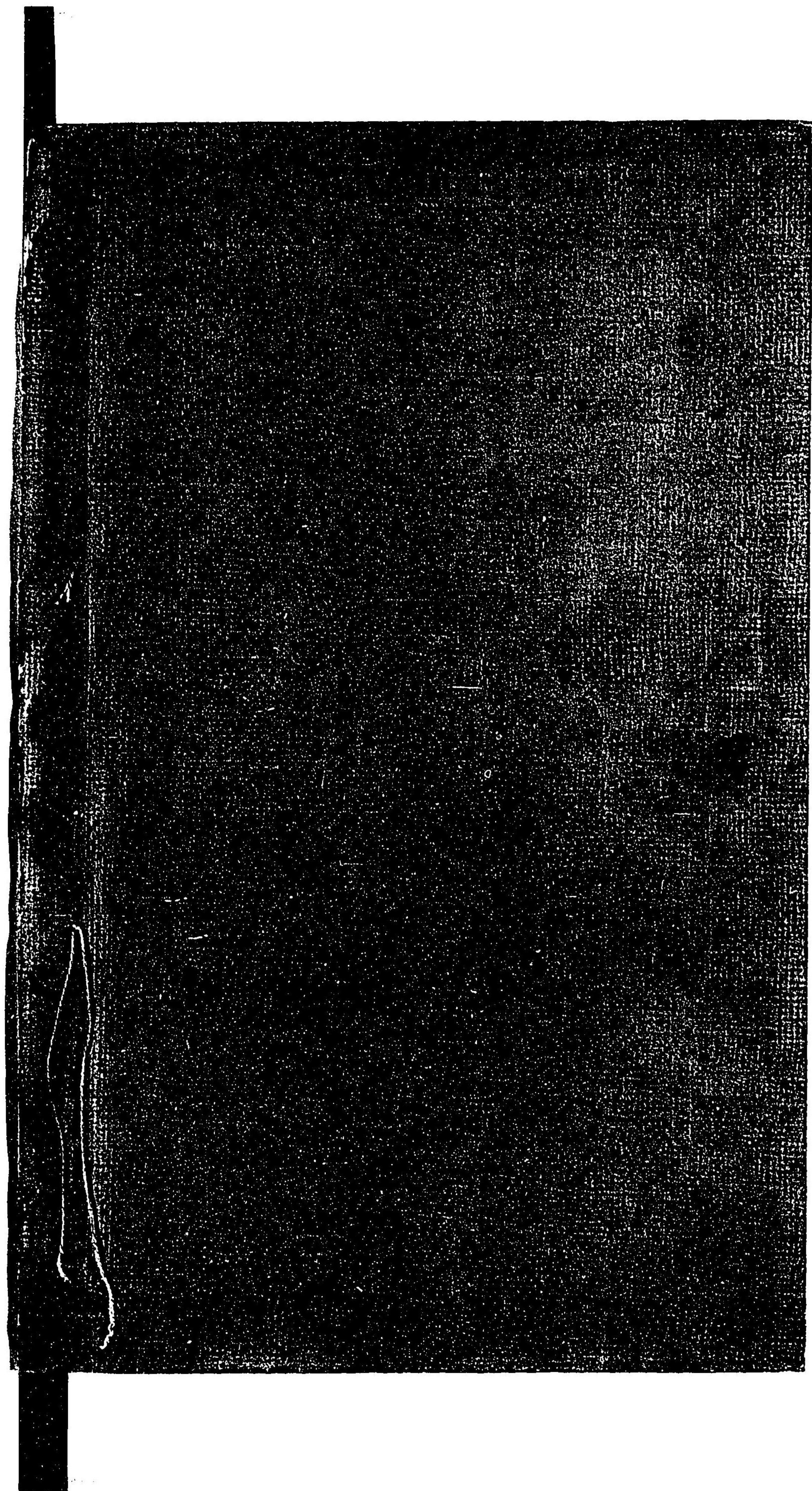
發賣元

同 京橋區尾張町二丁目十四番地  
潤生舍

稟告 右鵜刻著手候處御傳聞にて望外ニ諸君の賛成を得感荷に堪へせ就てハ一層念入原本の誤謬を正し猶二輯三輯引續き出版致さべく尤第三輯卷末にハ清國閩海鄭居仲著國姓爺傳を其儘収録し併て大方に參觀に供せんと欲と乞ふ第一輯と同く陸續御購讀あらんことと

賣	東京日本橋通三丁目	丸善	東京淺草區茅町二丁目	須原屋
捌	同 京橋區南鍋町一丁目	兔屋	同 麴町區飯田町貳丁目	同益出版會社
同	同 區南傳馬町二丁目	有隣堂		
所	同 日本橋區馬喰町二丁目	森治		





特40

38

東 京 圖 書 館

一	一	三	八	傳	和
冊	號	架	函	記	書
				類	門

090662-000-0

特40-38

伝義忠命姓国

(明清軍談) 上卷

潤生舎

M16

DBN-1251

